

古代ギリシアにおける教養・教育の理念に関する研究 (7)

—W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ—

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (7): Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

Jun HATA

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の経緯と小論の対象について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886～1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究 (4) (都留文科大学大学院紀要第 20 集、2016 年 3 月) に直接連続する。具体的には、『パイデア』第 II 卷 (第 3 編) の「2 The Memory of Socrates ソークラテースの思い出」の (第 1 節) 「THE SOCRATIC PROBLEM ソークラテース学派の問題」と (第 2 節) 「SOCRATES THE TEACHER 教師としてのソークラテース」の前半を対象とする。

2. 小論の構成について

小論 II. では、第 1 節 (A)、第 2 節 (B)、ともに独自の項を設定して、その項ごとに〈注記と考察〉として私の注記的なものと簡略な考察事項とを付す。訳文の項の区切りは、ドイツ語版にはない、英訳版で設定された 1 行空けの区切りを使っている。ただしその項の見出しは私が便宜的に付したものである。また第 1 節 (A)、第 2 節 (B) のそれぞれの末尾に「NOTES」(「ANMERKUNGEN」) を「原文注記」として配し、続いてそれに対する〈注記と考察〉を記す。第 1 節 (A) には、その部分としての〈全体の考察〉を置く。

なお小論の末尾に、III. 「現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート②」を置く。

3. テキストと論述の仕方

イ) テキストは第 II 卷 (1944 年版) を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは 1944 年版のものである。なお和

訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一卷にまとめられた復刻版 (1989年、初版は1973年) を用いている。

なおハイエットの英訳は、神経の行き届いた充実したものであり、しばしばイエーガーと協議しながらなされており、文意がドイツ語版よりも明瞭化されていたり、原文注記において充実化が図られていたりするなど、イエーガーの著書と呼んでよい性質がある。本継続研究 (3) を参照のこと。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し (格変化などは原文中の使われ方のまま扱っている)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。文章中の参照文献の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

ハ) カッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ) <注記と考察>における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究 (5) と同様である。

II. 「ソクラテースの思い出」(英訳版第II巻第3編の2 The Memory of Socrates)

英訳版第II巻、1944年版：17p～29p

A. ソクラテース学派の問題

(THE SOCRATIC PROBLEM, Das sokratische Problem)

1. ソクラテースを記憶しようとする事——対話篇の創案、諸学派の対立

<訳文> 17p～21p

われわれが掴むことのできるもっとも基本的な事実とは、ソクラテースその人ではなく、なぜなら彼は何も書き記さなかったから、彼の弟子たちによる、すべてほとんど同じ時代に書かれた、何冊かの著作である。それらのいくつかが彼の生存中に書かれたかどうかを明確に言うことは不可能であるが、しかし、それらは十中八九そうではなかっただろう。^{〔5〕}ソクラテース文学 (the Socratic literature, der sokratischen Literatur) の源 (the origins, der Ursprungsbedingungen 源泉の条件) と、イエスの生活と教えについての最古のキリスト教徒の言い伝えのそれとの間には、しばしば指摘される明瞭な類似点がある。イエスと同じように、ソクラテースの、彼の弟子たちへの影響が、一つの彼の明確な像へと成長していくのは、結局彼の死以降のことであった。その圧倒的な経験は、彼らの人生に深く激烈な変化をもたらした。彼らが自分たちの先生のことについて知っていることを書き記しはじめたのは、明らかに悲劇的な結末 (the catastrophe, seinem Tode 彼の死) の衝撃の下においてであった。^{〔6〕}それと同時にソクラテースの描写が、それはそれまでは流動的で変わりやすいものであったが、厳格になり始め、その容貌が同時代の人びとと後世の人びとにとって固定されるようになっていった。プラトーンでさえ彼に、陪審員 (the jury, den Richtern 裁判官たち) に向かって彼自身の弁明で語りながら、彼の死以降自分の弟子たちや友人たちがアテネ人をそっとしておくことはなく、むしろ

容赦のない詰問者であり勧告者としての彼の仕事を遂行するであろう、と語らせている。⁽¹⁾ ソクラテース学派の運動の行動計画はこれらのことばに含まれており、その影響は、急速に増えるソクラテース文学によって増大した。⁽⁸⁾ 彼の門下生たちは、その方、その彼を地上の司法が彼と彼のことばをアテネの人びとの記憶から抹消するために殺害したのであったが、その方の忘れがたい人格に、そのときもそれから彼の警告が人びとの耳からしだいに消えていくことがけっしてないように、永遠性が与えられるべきだと決心した。それまでは彼の信奉者の小さな集団に限られていた倫理的な動揺が、今やそれが社会全般に影響を及ぼすまで広がった。彼の思想は新しい世紀の全ての文学 (the literature, literarische) と哲学の焦点となり、そこから生じる運動は、アテーナイの現世の力が崩壊したあとは、世界中に及ぶその精神的な支配権の大黒柱 (the mainstay, die Hauptquelle 主要な源泉) となった。

われわれに伝えられてきているあの文学 (literature) の遺物—プラトンの対話篇、クセノポーンの対話篇、クセノポーンの『ソクラテース言行録』⁽²⁾、それから、アンティステネース⁽³⁾ や Sphettus のアイスキネース⁽⁴⁾ によって書かれた対話篇の断片—から判断すると、それらは多くの点で異なっているのであるが、一つのことばはまったく明瞭であり、つまり、彼の弟子たちの主目的は、彼らの人生を変容させた師の比類のない人格を再現しようということであった。対話篇と伝記的回想録は、ソクラテース学派の仲間によってその目的にかなうように創案された新しい文学形式 (literary forms, die Literaturformen) である。⁽⁹⁾ 双方共にその存在を、彼の弟子たちの、ソクラテースの教師としての知的、精神的な力 (power, Vermächtnis 遺産) は一人の人間としての彼の人格から引き離すことはできない、という確信に負っている。彼の人格の明瞭な印象を、彼については見たことも会ったこともない人間に提供することは困難なことだから、試みがなされるということは必須のことばであった。われわれは、ギリシア人の見地からすると、そのような事業の革命的な斬新さをほとんど強調し過ぎることはない。何しろギリシア人の人間と人間人格 (human character, menschliche Eigenschaften) に対する見方は、彼らの個人的、公的生活とまったく同じくらい因習 (convention, des Typischen 類型的なもの) に支配されていたのだから。われわれは、もしわれわれが4世紀前半に創案された他の文学 (literary, literarische) ジャンルを見つめるならば—つまり褒め言葉 (the encomium, das Enkomion) であるが—、ソクラテースがいかに古典期に支配的であった方法で讃美されていた (eulogized) かもしれないということが分かる。このジャンルもまた、傑出した個人の称賛を表すために作りだされたのであるが、しかしそのそうする唯一の方法は、その対象が理想的な市民、あるいは理想的な支配者にふさわしいすべての徳 (the virtues, der Tugenden) をもっているということをつよく主張することであった。ソクラテースについての真実 (the truth, dem Wesen 本質) は、そのような方法では決して語られるはずはなからう。したがって、彼の人格 (character, der menschlichen Persönlichkeit 人間人格) の研究から、まず第一に、心理学的叙述の方法 (the art of psychological description, die antike Individualpsychologie 古代の個人心理学) が生まれたのであり、その古代における最大の師がプラトーンであった。ソクラテースの文学的肖像が、古典ギリシアで生み出された偉大な独創的な人格の、唯一の本当に生きているような描写である。それを生み出した人びとは、人間の心の奥を探究しようとした

わけでも、詳細を極めた倫理的探究にたずさわるつもりでもなかったのであって、われわれが *personality* (人格) —彼らは人格の概念も、それを表すことばももっていなかったのであるが—と呼ぶものの感銘 (the impression, das Erleben 体験) を再現しようとしたのである。ソクラテースの実例はアレテー (arete) の意味を変えてしまったのであり、そしてその変化は、今と同じようにそのころも彼の人格に付随する、尽きることのない興味に映っている。

しかし彼の人格は主に、彼の他者への影響に表れていた。それは話し言葉をとおして作用した。彼は、唯一の重要事は、言葉と、それがあつた特別な瞬間に語られる、生きている人間との関係だと考えていたから、彼自身はまったく書き記さなかった。このことは、とくに彼はいつも一どんな伝統的な文学形式にも適合しそくない種類のもの—問いと答えによる談話を交わしていたから、彼を描写することを望む誰にとってもほとんど越えがたい困難となる。このことは、プラトーンの『パイドーン』⁽⁶⁾ の例によって示されているように、たとえ彼 (= ソクラテース) の会話の一部が記録されていて、それゆえいくらか正確に再現され得たと仮定しても、真実なのである。プラトーンを対話形式を生み出すように動かしたのは、あの困難さだったのであり、その形式が他のソクラテースの弟子たちによって真似られたのである。⁽¹⁰⁾ しかし、われわれはソクラテースその人の人格 (the personal character, die Persönlichkeit 人格) に、とくにプラトーンの著作物によって大いに接近できるのではあるが、彼の弟子たちは彼の対話の内容についてお互いに実に根本的に異なっていたので、彼らはすぐに論争と永続的な対立を開くに至った。ソクラテースは、彼の初期の評論で、いかにこの見ものがエリート仲間の外から意地悪く観察する者たちを喜ばせたか、またそれが、真相を知らない者をソクラテースに背かせるというということで‘競争相手 (opposition, Konkurrenz)’の仕事をいかに容易にしたかを示している。ソクラテースの死の数年後に、彼の信奉者たちはばらばらになった。彼の弟子たちのそれぞれは、師の教えについての自分の考えに熱情的に固執したのであり、したがって実際に、多くの異なるソクラテース学派が生まれた。この故に、われわれはソクラテースについて他のどのような古代の哲学者よりもはるかに多くの歴史的な言い伝えをもっているのであるが、われわれは彼の真の重要性についてまだ意見の一致をみることができない、という逆説が生まれるのである。確かに今日、歴史的な理解と哲学的な解釈における増大した技術をもって、われわれは立脚するより確かな基盤もっているように見える、ということは本当である。しかしソクラテースの弟子たち、その記述をわれわれは読むのであるが、その弟子たちは、非常に緊密に自分自身の人格と彼の人格と溶けあつてきたので (単に、彼らは自身と彼の彼らへの影響とを切りはなすことができないという理由で)、何千年も経って、われわれが純粋なソクラテースの本質を、そもそもあの合成物から蒸留することができるかどうかは疑わしい。

プラトーンの対話篇の形式は、まちがいなく一つの歴史的な事実によって生み出された—つまりソクラテースは問いと答えによって教えた、という事実である。彼、ソクラテースは、あの対話の形式が哲学的思考 (philosophic thought, des philosophischen Denkens) の元来の型 (the original pattern, die Urform 原型) であると、また二人の人間がどんな主題についても合意 (an understanding, Verständigung 意思の疎通) に達するた

めの唯一の方法であると考えた。そして彼の人生の目的は、彼が語り合う人びとと合意に達するということであった。プラトーンは、彼は生まれながらの劇作家であったが、彼がソクラテースに出会うまでは悲劇を書いていた。言い伝えによれば、彼は、偉大な質問者の人格の衝撃 (the impact, dem Eindruck 感銘) を受けて以降、それらを燃やしてしまった。⁽⁶⁾しかし、ソクラテースの死後、プラトーンが自分の師を生かしておこうと決心したとき、彼は、ソクラテースの会話を模倣しながら、自分の劇的な才能を哲学の貢献に就かせることができるということに気が付いた。しかしながら、その源泉をソクラテースに負っているのは対話形式だけではない。一定の非常に特徴的な逆説的なことばが、プラトーンのソクラテースの会話に繰り返し出ていて、またクセノポーンのソクラテースの記述に再現しているということは、プラトーンの対話篇の内容が、ある程度まではソクラテースの思想 (thought, Denken) から来ているということを確認できる。問題は、それらが実際にどの程度までソクラテース的なのかということである。クセノポーンの記録は、プラトーンとはほんの少し一致するだけであり、したがってわれわれには、クセノポーンは語り足りず、プラトーンは語り過ぎている、という感触が残る。アリストテレスでさえ、プラトーンによってソクラテースに帰せられている哲学の大部分は彼のものではなくてプラトーンの学説である、という見解を述べている。その判断においては、彼はいくつかの仮定、その価値はわれわれが後で確かめるが (英訳版 p.23:小論次節 2. の後段)、に基づいている。彼 (=アリストテレス) はプラトーンの対話篇を、一つの新しい芸術形式、つまり韻文と散文の中ほどの部分 (midway, ein Mittelding 中間物) だと考えている。⁽¹¹⁾それはおそらく、何よりも形式に関連しているが、その形式は実際には散文による知的な戯曲のそれである。しかし、プラトーンが歴史的なソクラテースを扱った自由さについてのアリストテレスの見解を考えると、われわれは、彼が対話篇を、形式においてだけでなく内容においても韻文と散文との混合と考えていると推論しなければならない、つまり対話篇は Wahrheit und Dichtung (真実と詩)、真実と想像を混ぜていると。⁽¹²⁾

当然にも、クセノポーンやソクラテースの他の弟子たちの対話篇を歴史資料として使うどのような試みも、同じ疑問と困難を受けることになる。クセノポーンの *Apology* (『ソクラテースの弁明』) (しばしば偽物であるとして片づけられているが、しかし最近もう一度本物と認められる) は、そのソクラテースをかばい立てしようとする明らかな意図ゆえに、ただちに疑わしい。⁽¹³⁾しかし彼の *Memoirs of Socrates (the Memorabilia)* (『ソクラテース言行録』)⁽⁷⁾ は、長く歴史的に信頼できるものと考えられてきた。もしそうであるならば、われわれは、対話篇を論じるときいたるところで現れてくるすべての不確かさから直ちに自由になることだろう。しかし最近の研究は、『言行録』もまた相当の主観的な彩色があることを示してきている。⁽¹⁴⁾クセノポーンは一人の若者としてソクラテースを知っていたし尊敬していたが、しかし一度も彼の本当の (regular, eigentlichen) 弟子になったことはない。彼はすぐに、反逆したペルシア王キュロスによって企てられた、その兄弟のアルタクセルクセスに対する闘いにおける傭兵として仕えるために、ソクラテースのもとを去った。彼は再びソクラテースに会うことはなかった。彼のソクラテースに関する本は、大部分は何十年かのちに書かれている。唯一の見たところ初期らしいものは「弁護」 (the *Defence*, „Schutzschrift“) 一つ

まりある‘indictment 告発’, („Anklageschrift 起訴状“) に対する擁護 (a vindication, eine Verteidigung 弁護)、である。⁽¹⁵⁾ この‘告発’は、明らかに文学的虚構であったが、紀元前400年から390年の間にソフィストであるポリュクラテース⁽⁸⁾によって発行された小冊子と同一であるとみなされてきている。リュウシアース⁽⁹⁾とイソクラテースは間違いなくそれに対する応答を書いたのであるが、しかしわれわれは、クセノポーンの『言行録』からは、彼も同時に弁護に出たということを知る。⁽¹⁶⁾ クセノポーン (ソクラテースの仲間としてすでに半分忘れられている) をソクラテースに関する執筆者の仲間 (into the circle of Socratic Writers, in die sokratische Literatur ソクラテース文学に) 初めて導いたのは、明らかにこの「弁護」である、といっても彼はそれを執筆してから何年も沈黙していたが。彼は後に、それを『言行録』の最初に据えている；しかしその構成的統一性とその完結性、そしてその明確な意図は、それはかつては別の作品であったことを示すのに十分である。⁽¹⁷⁾

その意図は明らかに、『言行録』それ自身の意図のように、ソクラテースは最高の、愛国心のつよい、敬虔で高潔なアテナイ国家の市民であって、彼は神に生贄を捧げ、予言者に助言を求め、困っている友人たちを助け、いつも公的生活で自分の義務を果たした、ということを示すことである。このこと (クセノポーンの叙述: Xenophons Darstellung) に対する唯一の難点は、もしソクラテースが単に俗物 (simply a Babbitt, ein solcher Biedermann そのような正直者、俗物) であるならば、同市民の嫌疑を呼び起こすことは決してなかっただろう、ましてや国家にとって危険であるとして死刑の宣告を下されることはなかっただろう、というものである。最近、クセノポーンのソクラテースに関しての評価は、彼は記録されている出来事の相当後になって著述しているということ、また彼には哲学的思考の才能がほとんどなかったということ、彼は自分の著作をほかの著書、とくにアンティステネースのものに基づかなければならなかったということ、を証明しようと試みている学者たちによって、さらに真実とはみなし難いものとされてきている。もしそうであるならば、このことは興味深いことである：それはわれわれに、われわれには失われたも同然の、ソクラテースの弟子でありプラトーンの敵対者である者のその仕事を再構成するのを許すことになるだろう。しかしそれは、クセノポーンのソクラテースを、アンティステネースの倫理論考 (moral disquisitions, die Moralphilosophie 倫理学) の単なる代弁者に変えてしまうことになるだろう。もちろんその仮説は行き過ぎたものとなっている；しかし (それでも: immerhin) そのような研究はわれわれに、クセノポーンは、哲学的な初心さ (navete, Naivität) にもかかわらず、あるいはそれ故に、相当数の特色において、われわれがプラトーンのソクラテース像がそうであると思うのを常としてきたのとまったく同様に主観的な (subjective, ‚interpretiert‘ 解釈する) ソクラテース像 (a picture of, Auffassung 理解) を創り出した、という可能性に気づいているようにさせる。⁽¹⁸⁾

<注記と考察>

(1) イェーガーが指摘する箇所は、久保勉訳『ソクラテースの弁明』(岩波文庫)では次のように訳されている (55p)。

「今諸君が、この行動に出たのは、そうすれば諸君はもはや諸君の生活について

弁明を求められなくなるであろうと思ったからである。しかし私は主張する。諸君には全然反対の結果が生ずるであろう、と。今よりもさらに多くの問責者が諸君の前に出現するであろう。諸君は気付かなかったが、これまでは私が彼らを阻んでいたのである。そうして彼らは若いだけにいっそう峻烈であり、諸君はいっそう深くこれに悩まされるであろう。けだし、…」

- (2) クセノポン：前430／428年頃～前352年頃。アテナイの軍人、歴史家・著述家で、イェーガーの著述に該当することとしては、松原著では、「前401年、ソクラテースの忠告をきかずにアカイメネース朝ペルシアの王子・小キュロスの遠征軍に傭兵として加わり、アルタクセルクセース2世の大軍とクーナクサで会戦。」と記されている。なお、松原著には、「稀有なことにその全作品がほぼ完全な形で伝存している一但し『アテナイの国政 *Athenaion Politeia*』は別人の作とされる。」と説明されている。なお、『ソクラテース言行録』の書名訳に関しては、〈注記と考察〉(7)を参照のこと。
- (3) アンティステネース：前455／444年頃～前365／360年頃。ギリシアの哲学者で、「初めゴルギアースに学び、教師をしていたが、のちソクラテースの熱心な弟子になる。ソクラテースにめぐり会うや教室を閉じ、「諸君、それぞれの師を探すがよい、私は今その人を見つけたのだ」と門弟たちに告げたという。ソクラテースの禁欲的で質実剛健な実践面を継承し、師の刑死（前399）後、アテナイ郊外のキュノサルゲスのギムナシオン（体育場）で教えた。「幸福は徳に、徳は知識に基づくが故に、徳は教え得る」と説き、富や名誉や快樂を蔑視、無欲にして自ら足れることを志した。「所有されないために、私は所有しない」を標榜し、「快樂よりはむしろ狂気を望む」「思慮は最も堅固な防壁」「徳は奪い去られることのない武器である」と言って、議論よりも実践を重んじ、財産を所有せず質素な衣服をまとい杖と頭陀袋を携えて歩いた。」という。なお、「およそ80歳（または90歳）で病死するまでに夥しい量の書物を著わし」たが、「著作はすべて散逸」したということである。（松原著）
- (4) アイスキネース：前5世紀末～前4世紀。ソクラテースの内輪の弟子で、「師が獄中で毒死する最期までその傍から離れなかった（前399）。」という。なお「現存する3つの対話篇が誤って彼に帰せられており、すでに古代においても彼の作品は剽窃や盗作の疑いをかけられていた。」という。（松原著）
- (5) 『パイドーン』（ドイツ語版では、*Theätet* となっている）には、たとえばソクラテースの死に立ち会った人びとの名が、パイドーンによって「アテナイの人たちでは、このアポドロスのほか、クリトブロスとその父（クリトン）、それにヘルモゲネスと、エピゲネスと、アイスキネスと、アンチステネスがいました。それから、パイアニア区の人クテシッポスとメネクセノス、そのほか何人かのアテナイ人がいました。プラトンはたしか病気ちゅうだったと思います。」（藤沢令夫訳、『プラトン』筑摩書房、1959年、所収）と語られるなど、記録性を伺わせる箇所はさまざまにある。
- なお、その記録性のことは別の問題として、松永雄二は『『パイドーン』解説』（『プラトン全集1』岩波書店、所収）で、「…以上のような見地から、筆者はまず、この『パイドーン』で語られる思想は、すべて歴史的なソクラテースの言葉をできるかぎり忠実に再現したものであるという、いわゆるバーネットおよびテイラーの仮説には、はっ

きりと別れを告げねばならない。」と述べている。

- (6) 松原著の「プラトーン」の記述には、「20歳の頃、悲劇の競演に参加しようとしていたところ哲人ソクラテースと出会ってその教えに惹かれ、自分の悲劇作品を火中に投じて弟子入りをした—その前夜、ソクラテースは1羽の白鳥が胸の中に飛び込んで来る霊夢を見たという—。」という一文がある。なお、ディオゲネース・ラーエルトイオス『ギリシア哲学者列伝』(加来彰俊訳、岩波文庫(上)、1984年、その中の「第3巻第1章 プラトン」)を参照のこと。
- (7) クセノポーンの *Memoirs of Socrates (the Memorabilia)* は、岩波文庫の佐々木理訳のように、『ソクラテースの思い出』として馴染まれてきている。しかし佐々木もその「まえがき」で、「書名の“Memorabilia”というラテン名も、十六世紀にできたものである。それ以前はギリシャ語で“Apomnemoneumata”と呼ばれていた。意味はいずれも「追想録というほどのものであって、あるいはソクラテース言行録という方が、内容にはかなうかもしれない。…いまでは『メモラビリア』がほとんど正規の名称になっている。」と指摘している。内山勝利の新訳(京都大学学術出版会、2011年)は『ソクラテース言行録』とされ、その「解説」で佐々木と同様の説明をしている。小論では「ソクラテース」を「ソクラテース」と表記しているので、小論訳としては『ソクラテース言行録』とする。
- (8) ポリュクラテース：前440年頃～前370年。アテーナイ出身のソフィスト。
- (9) リューシアース：前459／445年頃～前380／378年頃。アッティケーの10大雄弁家の一人で、「アテーナイ人がペロポネソス戦争に敗北した前404年、三十人僭主により財産没収のうえ投獄され、からくも脱出しメガラへ逃れた。翌前403年トラシュブーロスを手助けして帰国を果たし、法廷弁論代作者 *logographos* として生計を立てた。他人の弁論の草稿のほか、兄ポレマルコス *Polemarchos* を獄中で毒殺処刑した三十人僭主の1人エラトステネース *Eratosthenes* に対する弾劾演説(前403)や、告訴された哲学者ソクラテースを擁護する弁明文、前388年オリュンピアーにおいて自己の政見を発表したオリュンピアコス *Olympiakos* などが名高い。」といい、多作の人であったが、「伝存するのは偽作、断片を含めて34篇である。」という。また彼は、「プラトーンの対話篇『パイドロス』中で少年愛に関する詭弁的なエロース(恋愛)論を展開しているほか、『少年へ宛てた手紙』(散逸)の作者と伝えられており、後者は書簡文学の嚆矢とも見なされている。」という。(松原著)

2. プラトーンの学説とソクラテースとの関係についてのアリストテレスの観方、およびその後世への影響

<訳文> 21p～24p

根拠 (evidence, Quellen 情報源) の性質がそのようなものであって、このジレンマを免れることは可能だろうか。シュライエルマッハー⁽¹⁾は、この歴史的な問題の最大限の複雑さをただ一個の凝縮された問いとして言い表した最初の人であった。彼もまた、われわれはクセノポーンもプラトーンも排他的に信用してよいのではなく、熟練した外交官のように、ひそかに計って双方の当事者をお互いに争わせなければならないのだ、という確信に到達したのであった。そのように彼は問う：「ソクラテースは、クセノポー

ンが伝えるもののほかに、クセノポーンが明確にソクラテース的であったと言明する特徴と生活規範 (rules of life, Lebensmaximen) と矛盾することもなく、(さらに: noch) いったいどういう人物であり得たのか (what can Socrates have been) —そしてソクラテースは、プラトーンに、プラトーンが対話篇で行なっているように彼の肖像を描く、衝動と正当性を与えるためには、どういう人物だったにちがいないのか (what must he have been)?⁽¹⁹⁾ むろんこれらの言葉は、すべての研究事項に対する (to the whole question, für den Historiker 歴史家にとって) 魔法の合い鍵 (an *Open Sesame*, Zauberformel 魔法の言葉) ではない。それらは単に、われわれができるだけ批判的な手腕を用いなければならないはっきりしない領域の範囲を、できるだけ正確に定めるにすぎない。それらは確かに、もしわれわれがどこまでそれぞれの証拠資料を追っていくべきかを教えるもう一つの基準がないとすれば、われわれを、頼りなく、われわれ自身の主観的な印象を当てにさせることだろう。

その基準は、その主題についてのアリストテレスの言及によって提供されていると長く考えられていた。彼は、ソクラテースは何者だったのか、また何をするつもりだったのか、を証明することに、彼の直接の弟子たちが抱いたほどの情熱的、個人的関心をもたない、しかしそれでも、時代的には、ソクラテースをどんな現代人よりもより多く知るのに十分に彼に近い、そういう客観的な学者、思想家のように見えた。⁽²⁰⁾ アリストテレスのソクラテースに関する歴史的な言明は、それらは一つの問題—ソクラテースとプラトーンのイデア学説との関係—に限定されているので、それだけわれわれにとって価値がある。その問題は、プラトーンのアカデーメイアにおいて大いに討議された中心的な問題であった；その上、アリストテレスがそこで過ごした20年間、彼はその学説の由来 (the origin, des Ursprungs 起源) についての問題 (the question, die Frage) がしばしば論議されるのを聞いてきたに違いない。さてプラトーン対話篇は、ソクラテースを、イデア学説を提唱し、それが彼の弟子たちに知られていると明確に考える、そのような哲学者として描写している。プラトーンソクラテースの描写は、この問題で歴史的に正確なのだろうか、それともそうではないのか。この問いは、もしわれわれがソクラテースの学説 (Socrates' teaching, der Sokratik ソクラテース哲学) からプラトーン哲学の創造に至る知的な過程を再現したいと思うならば、根本的に重要である。アリストテレスは、彼はイデア学説—あの一般概念 (universal concepts, den allgemeinen Begriffen)⁽²⁾ は、感覚によって知覚される個別の事物とは性質が異なる客観的な存在があるとする—を受け入れていない、その彼は、この問題におけるプラトーンソクラテースとの関係について、三つの重要なことを述べている。

(1) 若い学徒としてプラトーンは、ヘーラクレイトス派のクラテュロス⁽³⁾の講義に参加したが、クラテュロスは、全てのものは流れゆきどんなものも永続する存在形式をもたない、と教えた。次に彼がソクラテースと知り合いになったとき、新しい世界が彼に開かれた。ソクラテースは自らを完全に倫理性の問題に限定し、正義、善、美、などの変わらぬ本質を究明しようとした。一見して、全ては変わるという考えと変わらぬ真理があるという仮定は、相互に排他的であるように思われる。しかしクラテュロスはプラトーンに全ては変わるということをまったく完全に確信させていたので、彼の確信は、彼がソクラテースの倫理的世界における不動の地点の断固とした探究から受けた

深い感銘によってさえも、揺るがされることはなかった。プラトーンはそれゆえ、クラテュロスもソクラテースも共に正しいという結論を下したのであり、なぜなら彼らは二つの異なった世界のことを語っていたからである。クラテュロスの全ては流れていくという所説は、ただ彼が知っている世界—知覚し得る現象の世界—に言及したのである；そしてプラトーンは、後になってさえ、絶えず変化するという学説は感覚世界には合致している、と主張し続けた。しかしソクラテースは、われわれの倫理的存在 (being, Wesen) としての存在 (existence, Dasein) が依拠している‘善い’、‘正しい’、‘美しい’のような述語、の概念的な本質を探し求め、流れゆくのではない真に (truly) ‘is 在る’ (wahrhaft „ist“) という異なる現実 (reality, Wirklichkeit) —というのは、それは変わることなく永遠に同一であり続ける—の方を目指していた。

(2) この一般概念を (the universal concepts, diesen allgemeinen Begriffen)、それはソクラテースが手ほどきしたのであったが、プラトーンは今やそれを、永遠に変化する世界とはかけ離れた、真實在 (true Being, das wahre Sein) の世界を構成するものと考えた。彼は、これらの実在するもの (essences, Wesenheiten)、それをわれわれはただ思考のなかでのみ掴むことができ、またそこに真實在の世界は存するのであるが、それをイデア (the Ideas, Ideen) と命名した。ここにおいて彼はソクラテース—彼は、イデアのことを語ってもいないし、それらが感覚世界と切り離されていると考えてもいなかった—を超えて進んだのである。

(3) アリストテレスによれば、次の二つのことは、もっともなこととして、また議論の余地もなく、ソクラテースのものともみなされてよい：つまり、彼はその一般概念 (the general concepts, der allgemeinen Begriffe) を定義し、また、彼はそれを見出すために帰納的方法を用いた。⁽²¹⁾

もしこの記述が正しいのであれば、それは、プラトーンの対話篇で提出されているソクラテース像の中のソクラテースの要素とプラトーンの要素とを区別することを、はるかに容易にする。シュライエルマッハーの研究定式 (research-formula, methodische Formel 方法論的規定) は、到達できない観念であり続ける必要はないのであって、ある程度実行され得る。この一世紀の研究がプラトーンの初期の著作であるということを示してきた、そういう対話篇においては、ソクラテースは実際にいつでも一般概念 (universals, dem Allgemeinen 一般的なもの) を質問している：勇気とは何か、敬虔とは何か、自制とは何か、と。そしてクセノポンさえ、ついでにということであるが、ソクラテースが絶えずあの性質 (that nature, dieser Art) の質問を実行し、またそのような概念の定義をしようとしていた、ということを特別に述べている。⁽²²⁾ それなら、われわれのジレンマ—*Plato or Xenophon?* (プラトーンか、それともクセノポンか)—から免れる方法があるように思われる。そしてソクラテースは抽象的な概念による哲学 (the philosophy of abstract concepts, der Begriffphilosophie) の創始者ということになる。これはツェラーが、彼の *History of Greek Philosophy* (『ギリシア哲学史』) の中でシュライエルマッハーの探求方法を実行しながら、彼 (=ソクラテース) を描写する方法である。⁽⁴⁾⁽²³⁾ この発想によれば、ソクラテースは、いわば、プラトーン哲学の前の地味な準備段階であった。彼 (=ソクラテース) は、プラトーンの大膽な形而上学的冒険を (さえも nur) 回避したのであり、また彼は、本質をそらし自らを倫理的問題に限定

することによって、新しい実践的な人生規準 (rule of life, Lebensweisheit 处世哲学・人生知) のための理論的な基礎固めをすることが自分の本当の関心事 (his real interest, der Versuch 試み) なのだということを証明したのである。⁽⁵⁾

<注記と考察>

- (1) F. シュライエルマッハー：1768年～1834年。ドイツの哲学者・神学者で、「近代神学の父」と称されるという。ハレ大学で学んだ時期は、「キリスト教の学問的研究およびギリシア哲学やカントを始めとする哲学の研究に励んだという。彼によれば「宗教は独自の精神領域をもつ。それは、理性に根拠を置く哲学や、意志に根拠を置く倫理学とは異なり、感情である。それゆえ宗教の本質は「絶対依存の感情」であると言われる。」と説明されている。(『岩波 哲学・思想事典』1998年)
- (2) 「一般概念」は universal (general) concept, (Allgemeinenbegriff) の訳で、「普遍概念」とも訳される。(『哲学事典』平凡社、1971年)
- (3) クラテュロス：前5世紀後半のギリシアのヘーラクレイトス派の哲学者で、「プラトーンの師の一人」とされる。ヘーラクレイトスの万物流転説をさらに進め、「流水は足を入れた瞬間ですら変化しているのだから1度でさえ同じ河に入ることはできない」と主張。「常に変化する万象について確定的なことは何も言えない」として唯一本の指を揺り動かすだけであったという。彼の懐疑論はプラトーン哲学にも影響を及ぼし、言語の起源に関するプラトーンの対話篇は『クラテュロス』と題されている。」ということである。(松原著) なお、「プラトーン哲学やストア学派、さらにキリスト教徒にまで影響を及ぼしている」(松原著) とされるヘーラクレイトスについては、本継続研究(4)の末尾の《原文注記》の<注記と考察>(2)、および、本継続研究(6)の末尾の《原文注記》の<注記と考察>(5)を参照のこと。
- (4) エドゥアルト・ツェラー：1815年～1908年。ドイツの哲学者、神学者で、「とくにギリシア哲学史家として著名」とされ、「ヘーゲル哲学から出発し批判哲学に近づきカント哲学の復興の先駆者の一人となる」という(『哲学事典』平凡社)。

なおツェラー著の和訳書『ギリシャ哲学史綱要』の所在のことを、本継続研究(4)のⅢ. 3. の<注記と考察>(3)に記した。その訳者である大谷長の「訳者序言」によれば、ツェラーには主著とされる *Philosophie der Griechen*. 1844-1852 (『ギリシア人の哲学』) があり、その「要約」という趣旨で *Grundriss der Geschichte der griechischen Philosophie*, 初版1883年、(大谷訳『ギリシャ哲学史綱要』未来社、1955年) が編まれたという。
- (5) イェーガーのこのパートの叙述は、彼が批判しようとしている、アリストテレス影響下の論調の趣旨を確認しているということである。

3. 現代に再現するソクラテース像をめぐる研究の対立——H. マイアーとスコットランド学派 (J. バーネット、A.E. テーラー)

<訳文> 24p～27p

長年これは、問題の最終的な解決として受け入れられた。それは、アリストテレスという偉大な権威に基づいていたのであり、またしっかりした科学的方法によって強

化されていた。しかしそれは、いつまでも満足のいくものであることはできなかったものであり、なぜならそれは、ソクラテースを貧弱な説得力のない人物に、また彼の概念による哲学 (conceptual philosophy, Begriffsphilosophie) を単なる平凡なものに作り替えたからである。それは、ニーチェが獐猛に攻撃した抽象的で学理的な (academic, schulmeisterliche 教師ぶった) 人物であった。⁽¹⁾ ソクラテースは世界を揺るがす (world-shaking, weltumwälzende 世界を根本的に変える) 重要性をもつ人物であるという信念をニーチェによって揺るがされたりはしない者は多くいたのであり；つまり彼らは単に、アリストテレスの (歴史的な証人としての：geschichtlichem Zeugen) 信頼性に対する信頼を失ったということである。⁽²⁾ 彼は、彼があれほど荒々しく攻撃するイデア学説の誕生について、本当に申し分なく公正 (disinterested, uninteressiert) であったのか。さらにまた彼自身、歴史的事実の評価を間違えていないのか。彼は、とくに哲学史についての彼の考えにおいて、自分自身の哲学的先入観によって支配されていないか。彼がプラトーンを無視してソクラテースに戻ったり、ソクラテースをより穏健に (moderate, nüchtern 醒めた) 一つまりよりアリストテレス的に一思い描くということは、実にもっともなことではないか。そんなことより、彼はソクラテースについて、彼が自らプラトーンの対話篇から取り出すことができると考えたことがら以上に、ほんとうに知っていたらどうか。これらの、また類似する、疑問 (questions, die Zweifel 疑念) をもって、ソクラテースの学説 (the teaching) の現代の研究は始まった。⁽²⁴⁾ もう一度学者たちは、彼らが頼りにしてきた堅固な基盤を放棄しなければならなかった；そして今日の疑問の不確かさを、その後ずっと出てきていた多様なソクラテース像の間の対極的な違いほど明瞭に証明するものは他にないのである。一つの良い例は、歴史的なソクラテースを見出そうとする、二つのもっとも印象的なもっとも学術的な現代の試みである一つまり、ベルリンの哲学者 H. マイアー⁽³⁾ のソクラテースについての偉大な著書 (book, Werk)、それに、文献学者 J. バーネット⁽⁴⁾ と哲学者 A.E. テーラー⁽⁵⁾ によって代表されるスコットランド学派によってなされた著作 (the work, die Arbeiten) である。

双方の当事者は、アリストテレスの証言を捨てることで始める。双方共に、ソクラテースをかつて存在したもっとも偉大な人物の一人と考える。彼らの間の論争は、次の一つの問いにまとめることができる—ソクラテースはそもそも哲学者であったのか、それともそうではなかったのか。彼らは、もし彼についての初期の見解が彼をプラトーンの偉大な哲学体系の入り口に立つ単なる補助的な人物 (Nebenfigur わき役) として叙述していることは正しいとするならば、そうではなかったということに同意する。しかし彼らは、自分たちの論証において、これとは全く異なっている。マイアーによれば、ソクラテースの (比類のない：einzigartige) 偉大さは、どうあっても彼を単に理論的な哲学者と判断することによっては測ることはできない。彼が成したことは人生に対する新しい態度 (attitude, Haltung) を創り出したということであり、それは人間の自由 (human freedom, der sittlichen Selbstbefreiung des Menschen 人間の道徳的な自己解放) に向けての長く苦しい上り坂の頂点を成したのであり、またそれは他の何ものによっても決して越えられるようなものではない。彼が述べ伝えた福音は、倫理の本質としての自制 (self-mastery, Selbstherrschaft) であり、自足 (self-sufficiency, Selbstgenügsamkeit) であった。このように彼 (=ソクラテース) は、救済という、キリストや東洋的宗教

と反対の像として立ち現れた。これらの二つの原理、つまりこれらの二つの福音、の間の闘いは、やっと今始まったばかりである。ソクラテースではなく、プラトーンが哲学的なイデアリズム (idealism, Idealismus)⁽⁶⁾ を基礎づけ、論理 (logic, der Logik) を創造し、抽象的な一般性 (the abstract universal, des Begriffs 概念) を見出した。プラトーンは、ソクラテースと比較できない、全く異なる別個の人間 (person, Genie 才能) であった：つまり彼は体系的な思想家であり、理論の建設者であった。彼は、その対話篇において、自分の理論をソクラテースに帰すために芸術家の自由を使った。彼がソクラテースを実際にそうであったようにまざまざと描いたのは、彼の初期の作品においてだけである。⁽⁷⁾⁽²⁶⁾

スコットランドの学者たちも、プラトーンは自らの師であるソクラテースを共感をもってまざまざと描くことのできた唯一の弟子である、と考えている—しかし彼らは、プラトーンは彼のソクラテースの対話のすべてにおいて (in all) そうした、と考えている。クセノポンは、彼らにとって、ソクラテースの真の重要性について何も理解しない、*par excellence* (典型的な, die Inkarnation 具現) 俗物である。しかし彼 (=クセノポン) は、自分の限界を理解していたのであり、したがって、単にソクラテースに関する他の人の著作の補遺を書くことだけを請け負った。彼が本当の哲学的な問題に触れるときはどこでも彼は目をそらし、読者に、ソクラテースは自分が描写できるよりもはるかに偉大であったということを示すわずかなほめかしで満足する。この見解によれば、ソクラテースに関し流布している解釈の大きな誤りは、プラトーンは、ソクラテースを彼がそうであったように叙述しようとはせず、彼がプラトーン自身のイデア学説の、彼はそれに全く関係がないにもかかわらず、その創造者であると示そうとしたのだ、と信じることである。プラトーンは、こんなふうに表示のある意味で人を欺くことのできるような人間ではなかった。ある者は、(それにもかかわらず：dabei) 初期のプラトーンと後期のプラトーンとの間に不自然な区別を設け、‘初期プラトーン’のみがソクラテース自身を描こうと思ったのであり、しかるに‘後期プラトーン’は自分の師を自分自身の徐々に発展していく哲学に対する覆面として使った、と見なしてきた。これは、スコットランド学派によれば、本来的に (inherently, innerlich) ありそうもないことである。その上、プラトーンの初期の対話篇は彼の後の、より建設的な著作 (たとえば『パイドン』や『国家』) の学説を前もって仮定している。ほんとうの真実は、プラトーンがソクラテースの説 (teaching, Lehre) を発表することを止め、そのかわり自分自身の学説 (doctrines, Gedanken 思想) を詳しく説明し始めるや否や、彼は自分の対話篇で指導的人物としてのソクラテースを使うことを止め、まったく矛盾の無いようにそれらを言い表すために、他の、しばしば匿名の人物を使った。ソクラテースは、プラトーンが述べている、まさにそういう人—つまり、イデア学説、靈魂先在と想起の理論、不死の主義、そして理想国家、を創造した人—であった。一言で言えば、彼は西欧形而上学の父であった。⁽²⁷⁾

問いについて二つの極端な見解がある。一方においては、ソクラテースは少しも哲学者ではなくて、倫理的な (ethical, sittlicher) 鼓舞者、道徳的 (moral) 生活の英雄である。他方においては、彼は、プラトーンが彼の中に具現している思弁的な哲学の、その創始者 (the creator, der Urheber) と見なされている。この二分裂の意味は、単純に、

明らかに直接的にはソクラテースの死後直ちに、彼の門弟たちを対立する学派に分裂させた、その古い分割が再現し、もう一度それぞれの学派がその自らのソクラテースを生みだしつつある、ということである。前のように、二つの主要な党派がある。アンティステネース⁽⁸⁾は、何ごとかを知ること (das Wissen) は可能なのだ、ということをご否定したのであり、彼の学説の中心は‘ソクラテースの強さ’、つまり不動の (inflexible, unbeugsamen 不屈の) 道徳的 (moral, sittlichen) 意志であった。プラトーンは、他方、ソクラテースの何も知っていないという見せかけは、すでに魂に潜在している (latent, latenten) 諸価値についてのより深いいっそうゆるぐことのない知識を発見していく途上の単なる一段階である、と考えていた。これら二つの解釈者のそれぞれは、自らの完成した全思想をもって、自分自身のソクラテースが真のソクラテースであるということを探求してもう一度前へ進む。⁽⁹⁾ 同じ二つの対立する見解がソクラテースの死後に現れ、そしてわれわれ自身の時代に再現したとは、単なる偶然の一致であるはずはない。われわれはその再現を、われわれの証明がそれらの党派のどちらかの一方に由来するようなことでは、説明もできない。否 (No, Nein むしろ) : ソクラテースその人の人格は、彼をそれらの双方に同時に解釈できるようにする二重性 (the duality, die Amphibolie 多義性・あいまいさ) を包含していたのに違いない。われわれが双方の見解の不十分さ (the inadequacy, die Einseitigkeit 一面性) を超越するよう試みなければならないのは、その見地からなのだ—というのはそれらは、ある意味でそれらのそれぞれは事実的にも歴史的にも正しいのではあるが、不十分なのである。一方ではマイアーも、他方ではバーネットとテラーも歴史的な原理に基づいてその問題に取り組んでいるのであるが、彼ら自身の思考法が事実についての自分たちの解釈を (再三再四 : immer wieder) 粉飾してきた。それぞれの党派は、自分たちが決定的だと感じた問題について何の結論にも達しないソクラテースを受け入れることは不可能だと感じてきた。歴史家はそれゆえ、ソクラテース自身の人格は、そのときでさえ、あるいは彼の死後に、すぐに分離する矛盾するものを併せもっていた、と推論しなければならない。そのことは、われわれの見地からすれば、彼をより興味深く、より複雑に、しかしまた理解することをより困難に、させる。彼は非常に偉大な人物であったし、また彼の偉大さは、彼の同時代のもっとも賢明な人たちによって感じとられた。いったいどうして彼は偉大でもあり不確定で (inconclusive, „Noch nicht“) もあるということがあり得たのか。彼は、彼の生きた時代においてさえ解体の過程にあった、調和の最後の体現者であったのか。真実はどうあれ、彼は、早期のギリシア人の生き方と、彼が他のだれよりも近くまで接近した、しかし入ることは運命づけられていなかった、新しい未知の領域との間の境界地帯に立っているように見える。

<注記と考察>

- (1) イェーガーに拠るニーチェのソクラテース理解に対する批判については、「本継続研究(4)」のⅢ. 3. 「ニーチェのソクラテース憎悪について」を参照のこと。
- (2) イェーガーは、アリストテレスのソクラテース評価とニーチェのそれとの間に連続性を見ている。
- (3) H. マイアー : 1867年～1933年。ドイツの哲学者でベルリン大学の教授。

- (4) J. バーネット：1863年～1928年。イギリスのギリシア哲学研究の第一人者で、「その校訂になるプラトン全集 *Platonis opera*, 5巻 (1889～1907) は今日最良のもの。」とされる。(『哲学事典』平凡社)
- (5) A.E. テーラー：1869年～1945年。イギリスの哲学者でエディンバラ大学道徳哲学教授で、「はじめブラッドリーの観念論の見解に立ったがやがてあきたらず、新プラトン学派、スコラ哲学の影響を受けた所説を主張。」したとされる。また「哲学史家としても名高く、ことにプラトン哲学の新見解は著名である。」という。(『哲学事典』平凡社)
- (6) idealism (Idealismus) を、ここでは和訳することなく、「イデアリズム」のままにしておく。
- (7) ここのパートの叙述は、イェーガーによる、マイアーの学説の確認である。
- (8) アンティステネース：小論Ⅱ. 1. <注記と考察> (3)を参照のこと。松原著は、アンティステネースは「相弟子のプラトーンと烈しく対立し、「おおプラトーン君、私は『この馬』を見はするが、『馬なるもの』を見はしないね」とそのイデア論を批判——これに対してプラトーンは、「それは君にそれを見る目が欠けているからだ」と応じたという——」ということ、また「他方アニュートスらソクラテースを告発した者たちを、ソクラテースの令名を慕って海外からやって来た青年たちをけしかけることによって、国外追放ないし死刑に追いやったのも彼であるという。」ということも記している。
- (9) ソクラテースの門弟たちの対立が、現代に再び立ち現れた、という。

《原文注記》

5. 文字によるソクラテースの対話がソクラテースの生存中に現れたと確信している、もっとも著名な現代の二人の学者は、C.Ritter (*Platon* [Munich1910] I, 202) と、Wilamowitz (*Platon* [Berlin1919] I, 150) である。彼らの、プラトーンの最初の対話篇の早い年代設定は、これらの著作がもつ本質と哲学的内容についての、彼らの全体の考えの不可分の要素である。p. 88f. を参照のこと。
6. この見解を裏付ける詳細な根拠は、Ritterに反論するものとして、H. マイアーによって、彼の *Sokrates* (Tübingen1913) の p.106f. において与えられている。A.E. テーラーも、彼の *Socrates* (Edinburgh1932) の p.11 において、それを受け入れている。
7. プラトーン『ソクラテースの弁明』39c.
8. このことは、マイアーの *Sokrates* の 106. で示されている。
9. I.Bruns, *Das Literarische Portät der Griechen* (Berlin 1896) p.231f., そして R.Hirzel, *Der Dialog* (Leipzig1895) p.86 を参照のこと。
10. 対話篇の初期の発展については、Hirzel, *Der Dialog*1, 2f. を、またそれがとった形式と、ソクラテース学派の対話篇を書いた主要な著者については、p.83f. を参照のこと。
11. ディオゲネース・ラーエルティオス (3.37) によるアリストテレース (Rose, *Arist.* frg.73).⁽¹⁾
12. この見解はヘレニストの哲学者たちと同じくらい早くにもたれており、そのあとに

- キケロー⁽²⁾が続く、『国家論』1.10.16. [*Wahrheit und Dichtung*, 文字どおり *Truth and Fiction or Poetry*, はゲーテの有名な自叙伝の表題である。—訳者 (= イェーガー)]
13. 私は、K.von Fritz (*Rheinisches Museum* N.F.80,pp.36-68) はクセノポーンの『ソークラテースの弁明』を偽物だと信じる新たな理由を提供している、と考える。
 14. Maier, *Sokrates* 20-77.
 15. 私は、クセノポーンの『言行録』の最初の二章に対してこの名前を使うときは、マイアーの *Sokrates* 22f., その他に従う。
 16. 『言行録』の1.1-2においてクセノポーンは、(たえず: stets) ただ単数で‘the accuser 告発者’ (ὁ κατηγορος) のことを語っているが、しかるにプラトーンは『ソークラテースの弁明』において複数で‘accusers 告発者たち’のことを語っており、それは実際の過程の状況に符合する。クセノポーンもまた法的な告発への回答で始めているけれど、彼は(そのあと:dann) 主に、(われわれが他の資料から知るように) ポリュクラテースの小冊子の中で死したソークラテースに浴びせられていた非難、と戦うことに没頭している。
 17. Maier, *Sokrates* 22f. の説得力のある説明を参照のこと; 彼はまた、クセノポーンの‘Defence 弁護’ („Schutzschrift“) と彼の『ソークラテースの弁明』との関係について考察している。クセノポーンがどのようにして、もともとは独立した著作をより大きな全体に組み入れることができたかを示す一例は、彼の『ヘッレーニカ』*Hellenica* (1.1-2.2) の冒頭である。⁽³⁾ この部分はもともと、トゥーキューディデースの歴史を完成することが意図されていたのであり、当然にもペロポネネソス戦争の終結で終わる。後に彼はそれに、404年から362年までの彼のギリシア史を付け加えた。
 18. ソークラテースについてのクセノポーンの叙述がアンティステネースに依存していることは、初めてF.Dümmmlerによって、彼の二つの小論 *Antisthenica* と *Academica* のなかで、それから K. Joëlによって、彼の長期にわたる学識ゆたかな著作、*Der echte und der xenophontische Sokrates* (Berlin 1893-1901) のなかで調べられてきた。しかし Joëlの結果は、なるほどと思えるように、仮説に重みをかけられ過ぎている。Maier (*Sokrates* 62-68) はその著者の誇張を篩い分け、彼が成した結論で本当に受容できるものを示そうと試みた。
 19. F. シュライエルマッハー, *Ueber den Wert des Sokrates als Philosophen* (1815), in his *Sämtliche Werke* III, 2, p.297-298.
 20. これは、Zellerによって、彼のソークラテース学派の問題 (the Socratic problem, der Sokratesfrage) の扱い方で持たれた見解であった。: *Die Philosophie der Griechen* II, 1⁵, pp.107 and 126.
 21. その主題についてのアリストテレースの見解は、それは繰り返して現れることもあればお互いに補足することもあるのだが、Met.A.6.987a32-b10⁽⁴⁾;M.4.1078b17-32⁽⁵⁾;M.9. 1086b2-7⁽⁶⁾;and *de part.an.* 1.1.642a28.⁽⁷⁾にある。プラトーンとソークラテースとの間の関係についての彼の考えにしたがって、A.E. テーラーは、アリストテレースが際立たせるそれらの間の相違を最小限にしようと試みてきた。彼とは対照的に、Rossによるアリストテレースの証言の意味の、新たな注意深い吟味を、

それはその証言の価値を確証するものであり、参照のこと：Aristotle's *Metaphysics* (Oxford1924) 1, p.xxxiiif., and *The Problem of Socrates* (Presidential Address delivered to the Classical Association, London 1933) .

22. クセノポーン『ソークラテース言行録』4.6.⁽⁸⁾
23. E.Zeller, *Philosophie der Griechen* (『ギリシア人の哲学』) II . 1⁵, pp.107and126. ツェラーの、アリストテレスの証言への信用は、基本的には、Joël (note18) p.203, と T.Gomperz, *Griechische Denker* II (4th de.) p.42f. によって共有されている。
24. とくに Maier, *Sokrates* 77-102, そして Taylor, *Varia Socratica* (Oxford1911) 40. の批評を参照のこと。
25. Maier, *Sokrates* と A.E.Taylor—彼にまったく反対なのであるが—の *Varia Socratica* と *Socrates* (Edinburgh1932) を参照のこと。Taylor は概して Burnet の、彼が発展させ念入り作り上げた見解に一致する。Burnet の *Greek Philosophy* (London1924) と彼の、Hastings の *Encyclopedia of Religion and Ethics*, vol. xi にある論文 *Socrates* を参照のこと。C.Ritter は、*Sokrates* (Tübingen1931) の著者であるが、アリストテレスの証言の価値を否定するもう一人の人である。
26. Maier, *Sokrates*104f., は、ソークラテースの実際の人物 (the real character, wirklich) についての主要な証拠は、プラトーンの、‘本人自身の personal (persönlichen)’ の著作 (『弁明』や『クリトーン』⁽⁹⁾) によって与えられていると考えている；それらの後、と彼は考えているのだが、『ラケース』『カルミデース』『リュシシス』『イオン』『エウテュプローン』、そして二つの『ヒッピアース』と呼ばれているもの、のような小規模の対話篇が続く—それらは、彼は、創作で、しかし本質においては真実性をもつと考えている。⁽¹⁰⁾
27. 注記 25. で引いた Taylor と Burnet に拠る著作を参照のこと。

<注記と考察>

- (1) ディオゲネース・ラーエルティオス：後3世紀初頭に活躍。ギリシアの伝記作家・哲學家で、「今日も現存する『ギリシア哲学者列伝10巻をギリシア語で執筆した』」という。「古代ギリシア哲学史の研究上、貴重な資料」で、「250人にのぼる数多くの著者による350以上の書物を典拠として用いて」いるという。(松原著)
 なお、『ギリシア哲学者列伝』は、加来彰俊によって和訳されている(岩波文庫、上・中・下、1984年、1989年、1994年)。
- (2) キケロー、マルクス・トゥッリウス：前106年1月3日～前43年12月7日。共和制末期の雄弁家、政治家、文学者で、「ローマ随一の偉大な雄弁家として、また哲学などギリシアの学術をラテン語に移しヨーロッパ近代諸言語の文語体形成に多大の影響を及ぼしたラテン散文の完成者として、古来高く評価されている。」という。また「ギリシアのデーモステネースと並ぶ弁論術の双璧と称され、後世ヨーロッパにおける七自由学芸中の「修辞学」の寓意 Allegoria 図像には、たいがい彼の姿ないし著書が描かれている。」という。さらに「ルネサンス期以降、西ヨーロッパでキケローの純粋なラテン語の文体に倣う「キケロー主義 Ciceronianismus」が広まり、人文主義教育の基礎として讃仰されたのみならず、エラスムスやドレにはじまるキケロー

論争をも生じせしめたことは文学史上に名高い。文学のみならず、政治思想や哲学・倫理思想、教育等々、多方面にわたってキケローが後世に及ぼした影響は測り知れず、わけても彼の造語たるフーマニタース humanitas (人間性・全人的教養) を通じてイタリア・ルネサンス以来の人文主義 Humanismus の形成・確立に最も大きく寄与した古典作家であると言ってよいだろう。」という。(松原著)

- (3) クセノポーンの『ヘッレーニカ』(前411～前362年のギリシア史)は、「トゥーキューディデースの後を承けた史書」で、7巻よりなるという。(松原著) なおペロポネネソス戦争は前431年～前404年。
- (4) アリストテレス『形而上学』の該当箇所は下記のとおりである。(『アリストテレス全集 12』岩波書店、1968年、に拠る。)

「いま述べられた智慧の愛求〔哲学〕について、プラトンの哲学が生まれた。これは多くの点でかれらの哲学に従っていたが、しかしまた、あのイタリアの徒の哲学とはちがった独特な点をももっていた。というのは、若いころからプラトンは、初めにクラテュロスに接してこの人のヘラクレイトス的な意見に親しんだ、そして、——この意見では、およそ感覚的な事物はことごとく絶えず流転しているので、これらの事物については真の認識は存しえないというのであるが、——この意見をかれは後年にもなおそのとおりに守っていたからである。ところでソクラテスは、倫理的方面の事柄についてはこれを事としたが、自然の全体についてはなんのかえりみるところもなく、そしてこの方面の事柄においてはそこに普遍的なものを問い求め、また定義することに初めて思いをめぐらした人であるが、このことをプラトンはソクラテスから受け継いで、だがしかし、つぎのような理由から、このことは或る別種の存在についてなさるべきことで感覚的な存在については不可能であると認めた。その理由というのは、感覚的事物は絶えず流転しているので、共通普遍の定義はどのような感覚的事物についても不可能であるというにあった。そこでプラトンは、あの別種の存在をイデアと呼び、そして、各々の感覚的事物はそれぞれのその名前のイデアに従いそのイデアとの関係においてそう名づけられるのであると言った。けだし、或るイデアと同じ名前をもつ多くの感覚的事物は、そのイデアに与かることによって、そのように存在するというのであるから。ところで、ここに「与かること」と言ったこの言葉だけはかわった点である。というのは、ピュタゴラスの徒は存在する事物が存在するゆえんをば数に「まねること」によってであると言っているが、それをプラトンは、この言い方だけ変えて、「与かること」によってとしているのであるから。しかしとにかく、エイドス〔すなわちイデア〕に与かるとかまねるとかいうことはいったいなんのことか、——このことについては、かれらはこれを共同の研究課題としてわれわれに残した。

だがプラトンは、さらに… (以下略) …」

- (5) 『形而上学』の該当箇所は、少し手前から引くと、下記のとおりである。
- 「…ところで、このエイドスについての意見がその主張者たちに生じるにいたったのは、かれらが、真理の問題に関して、ヘラクレイトスの言説に服したからである、すなわち、その言説によると、およそ感覚的な事物は絶えず流転している。

したがって、いやしくも認識または思慮〔知恵〕が或るなにものかについてであるならば、感覚的事物よりほかに或る他の常に同一に止まる実在が〔認識の対象として〕存在すべきである。というのは、流転してやまない事物については認識はありえないからである。しかし、ソクラテスが倫理上の諸徳について専念し、そしてこれらの諸徳について、初めて普遍的な定義を求めることにつとめたときには、——というのは、自然学者たちのうちでは、ほんのわずかにただデモクリトスだけがこのことに触れ、熱さとか寒さとかを或る仕方^で定義したが、他方ピュタゴラスの徒は、それより以前に、或る少しの物事についてこのことに触れ、これらの説明方式を、たとえば「好機」とか「正義」とか「結婚」とかのなにであるかを問い求めたことには当然の理がある、というのは、かれは推理することを求めていたのであり、そして推理の出発点〔前提〕はまさにこの「なにであるか」にあるからである。けだし、弁証論は、その当時なおいまだ、物事^のなにであるかを知らないでも、反対のものどもについて論じることができ、または果たして同じ一つの学が同時に反対のものどもを対象とするか否かを議することができるほど、それほど強くはなっていなかったからである。だから、二つのことが、正当にソクラテスに帰せられよう、すなわち、帰納的な論法と普遍的な定義をすることが。というのは、これらは両方とも認識〔または学〕の出発点だからであるが。——そのときには、ソクラテスは、その普遍的な諸概念あるいは諸定義を、離れて存するものとはしなかった。しかるに、あの人々は、それらを切り離した、そしてそのように離れて存するものどもをイデアと呼んだ。… (以下略) …」

(6) 『形而上学』の該当箇所は、少し手前から引くと、下記のとおりである。

「…かれらは、感覚界の個別的事物は流転していて、それらのなにひとつも同一に止まるものはないと考え、そして普遍的なものはそれらよりほかに存在し、それらとは異なる或るものであると考えた。もっとも、こうした考えを誘発したのは、さきの個所でも語ったとおり、ソクラテスその人であり、かれの求めた定義によってである。ただし、かれはその諸定義を個別的事物から切り離しはしなかった。そして、この切り離さなかつた点では、かれの考えは正しかった。このことは、その諸結果からみて明らかである。というのは、もちろん普遍的なものなしには認識はえられないが、これを個別的事物から切り離すことは、あの困難な諸結果がイデアに関して生じてくることの原因であるからである。しかるにかれら〔ソクラテスの後継者たち〕は、いやしくも感覚的・流転的な事物よりほかに或る実体が存在すべきであるからには、これらの実体は〔感覚的な個別的事物から〕離れて存するものでなくてはならないと考え、しかもかれらは他にそうした実体をもっていなかったので、あのように〔個別的事物について〕普遍的に述語されるものどもを離れて存する実体であるとした。… (以下略) …」

(7) アリストテレスの『動物部分論』の該当箇所は、下記のとおりである。(『アリストテレス全集 8』岩波書店、1969年)

「われわれの先人たちがこういう考え方に至らなかつたわけは、まだ「本質」の考えや「実体」の定義がなかつたからで、この点に触れたのはデモクリトスが始めであるが、それも自然研究に必須なものだからというより、事実そのものに引

きずられて止むなく認めたことである。この考え方はソクラテス時代になると発展したが、自然に関する事物を探究することはすたれ、哲学する人々は人生に有用な徳や政治の方に傾いてしまった。」

- (8)『ソクラテス言行録』の該当箇所は、「エウテュデモスとの対話 (四)」として、ソクラテスの「敬虔」「正義」「知」「善」「美」「勇気」についての対話的考察、が叙述されている。(内山訳『ソクラテス言行録1』p252~261)
- (9) クリトーン：前5世紀中頃～前4世紀前半。ソクラテスの親友・弟子で、「同年配のソクラテスを深く愛し、その臨終に至るまでいろいろと身の世話をやいた。」という。(松原著) クリトーンについては、対話篇『クリトーン』が最高の案内となろう。
- (10) 一般にプラトンの諸対話篇は、前期、中期、後期の三つに区分して受け止められているが、ここで指摘されている諸対話篇は、その前期に該当するものである。

<全体の考察 [A] >

この章(A)の考察は、「B. 教師としてのソクラテス」の章が終わってから改めて行なうので、ここでは、イエーガーの叙述からとくに教えられる二点について簡略に記しておく。

- [1] ソクラテスの刑死後に門弟たちが「ソクラテス文学 (the Socratic literature, der sokratischen Literatur)」と呼ばれるものを生んだことについて

イエーガーの論述で注目しておきたいことの1つは、従来のギリシア文学とは異なる表現形式として「ソクラテス文学」、つまり「対話篇」が生みだされたということである。ソクラテスの弟子たちは、「悲劇的な結末」の衝撃の下に、自分たちの師のことを書き記し「永遠性」を与えておこうとした。しかしソクラテスを書き記すということには、格別の困難さがあった。イエーガーはこのことに考察を加え、「対話篇と伝記的回想録は、ソクラテス学派の仲間によってその目的にかなうように創案された新しい文学形式 (literary forms, die Literaturformen) である。」と述べている。その比類のない最高の結晶がプラトンの諸対話篇ということになるが、ソクラテスを記すとは、その人の狭義の学説 (風なもの) を書きとどめるということとは、本質的に異なっており、それは対話の「文学」として実現されているのである。イエーガーは、「ソクラテスの文学的肖像が、古典ギリシアで生み出された偉大な独創的な人格の、唯一の本当に生きているような描写である。それを生み出した人びとは、人間の心の奥を探究しようとしたわけでも、詳細を極めた倫理的探究にたずさわるつもりでもなかったのであって、われわれが *personality* (人格) —彼らは人格の概念も、それを表すことばももっていなかったのであるが—と呼ぶものの感銘を再現しようとしたのである。」と論述している。ソクラテスの弟子たちが師から受けた圧倒的な感銘の正体は、この「人格 (*personality*)」と呼ぶべきものの立ち現われであり、彼らはその感銘を記しておこうとした。

第2に、上述のこの光の当て直しということであるが、イエーガーは、「それまでは彼の信奉者の小さな集団に限られていた倫理的な動揺が、今やそれが社会全般に影響

を及ぼすまで広がった。彼の思想は新しい世紀の全ての文学と哲学の焦点となり、そこから生じる運動は、アテナイの現世の力が崩壊したあとは、世界中に及ぶその精神的な支配権の大黒柱 (the mainstay) となった。」と叙述している。同様に、「ソクラテースの実例はアレテー (arete) の意味を変えてしまったのであり、そしてその変化は、今と同じようにそのころも彼の人格に付随する、尽きることのない興味に映っている。」とも述べている。その変化の本質をイエーガーは、ギリシア人の「褒め言葉」の具体的な意味で説明している。つまり、(前) 4 世紀前半に創案された他の文学ジャンルでの唯一の方法は、「その対象が理想的な市民、あるいは理想的な支配者にふさわしいすべての徳 (the virtues) をもっているということをつよく主張すること」であったという。⁽¹⁾そして、そのようなものとは異質のアレテーがソクラテースのなかに立ち現われていたとして、「ソクラテースについての真実 (the truth, dem Wesen 本質) は、そのような方法では決して語られるはずはなかろう。」と述べている。

第3に、ソクラテースの文学的肖像は「対話篇」という文学形式をとるしかなかったのであるが、その対話篇は、ソクラテース自身の「問いと答えによって教えた」という実践そのものに由来するということである。イエーガーは、「彼、ソクラテースは、あの対話の形式が哲学的思考 (philosophic thought, des philosophischen Denkens) の元来の型 (the original pattern, die Urform 原型) であると、また二人の人間がどんな主題についても合意 (an understanding, Verständigung 意思の疎通) に達するための唯一の方法であると考えた。そして彼の人生の目的は、彼が語り合う人びとと合意に達するということであった。」と述べている。つまりソクラテース文学は、ソクラテースが拓いた「哲学」の結実なのである。⁽²⁾

第4に、ソクラテースの肖像(「ソクラテース文学」)が各様に描かれたということ、つまりソクラテースの刑死後、弟子たちは諸学派に分裂したのである。イエーガーは、伝えられてきている何人かの文学の遺物について触れながら、「彼の弟子たちの主目的は、彼らの人生を変容させた師の比類のない人格を再現しようということであった」と述べながらも、「それらは多くの点で異なっている」という留保を付けている。別の箇所では、「彼の弟子たちは彼の対話の内容についてお互いに実に根本的に異なっていたので、彼らはすぐに論争と永続的な対立を開くに至った。」「したがって実際に、多くの異なるソクラテース学派が生まれた。」と述べている。

ソクラテース像をめぐる矛盾はソクラテース文学にすでに現れているのであるが、その矛盾は、ソクラテースとプラトーンとの関係理解の問題として現代に再現する。イエーガーはこのことの考察をていねいに進め、独自の見解を提示していく。

[2] ソクラテース像の矛盾、ソクラテースとプラトーンとの関係認識の対立

イエーガーの論述で注目しておきたい第1のことは、アリストテレスの「ソクラテースとプラトーンの間接的関係」についての評価、そしてそれが後世に与えた大きな影響についてである。その具体的な内容は本文で明快に論述されているので、ここでは略しておく。ただイエーガーの、「彼 (=アリストテレス) は、ソクラテースは何者だったのか、また何をなすつもりだったのか、を証明することに、彼の直接の弟子たちが抱いたほどの情熱的、個人的関心をもたない、しかしそれでも、時代的には、

ソクラテースをどんな現代人よりもより多く知るのに十分に彼に近い、そういう客観的な学者、思想家のように見えた。」という記述には注意を払っておきたい。「ソクラテース文学」を生み出した師の弟子たちとアリストテレスとの関心のもちようの対照は、ソクラテースとプラトーンの本質理解に関わっている。

第2に、上記のアリストテレスの評価を批判しつつ、改めてソクラテース像に迫ろうとする現代の研究の動向が論じられている。イエーガーは、そのアリストテレスの評価に対する学者たちの疑念について、「彼 (=アリストテレス) は、彼があればほど荒々しく攻撃するイデア学説の誕生について、本当に申し分なく公正であったのか。さらにまた彼自身、歴史的事実の評価を間違えていないのか。彼は、とくに哲学史についての彼の考えにおいて、自分自身の哲学的先入観によって支配されていないか。彼がプラトーンを無視してソクラテースに戻ったり、ソクラテースをより穏健に一つまりよりアリストテレス的に一思い描くということは、実にもっともなことではないか。そんなことより、彼はソクラテースについて、彼が自らプラトーンの対話篇から取り出すことができると考えたことがら以上に、ほんとうに知っていただろうか。」とまとめている。

第3に、H. マイアーとスコットランド学派 (J. バーネット、A.E. テーラー) とが、現代に再現するソクラテース像をめぐる対立として、吟味されている。イエーガーによれば、その論争点は、「ソクラテースはそもそも哲学者であったのか、それともそうではなかったのか。」という問いにまとめられるという。マイアーはソクラテースの偉大さを、「人生に対する新しい態度 (attitude, Haltung) を創り出したということ」「人間の自由 (human freedom, der sittlichen Selbstbefreiung des Menschen 人間の道徳的な自己解放) に向けての長く苦しい上り坂の頂点を成した」ことに認める。バーネットとテーラーはソクラテースを、「プラトーンが述べている、まさにそういう人一つまり、イデア学説、靈魂先在と想起の理論、不死の主義、そして理想国家、を創造した人一つであった。一言で言えば、彼は西欧形而上学の父であった。」と捉えている。

第4に、当然にもイエーガーは、自身の探究観点の論述に向かう。まず彼は、歴史を俯瞰し「同じ二つの対立する見解がソクラテースの死後に現れ、そしてわれわれ自身の時代に再現したとは、単なる偶然の一致であるはずはない。」と考察する。イエーガーはその意味を吟味し、マイアーもスコットランド学派も、「それらのそれぞれは事実的にも歴史的にも正しいのではあるが、不十分なのである」と捉え、自らは、「ソクラテースその人の人格は、彼をそれらの双方に同時に解釈できるようにする二重性 (the duality, die Amphibolie 多義性・あいまいさ) を包含していたのに違いない。」と考える。

イエーガーは改めて、「いったいどうして彼 (=ソクラテース) は偉大でもあり不確定でもあるということがあり得たのか。」と問う。この矛盾をイエーガーは、ソクラテースをギリシアのアテーナイの歴史そのものの中に置いて考えようとし、「彼 (=ソクラテース) は、早期のギリシア人の生き方と、彼が他のだれよりも近くまで接近した、しかし入ることは運命づけられていなかった、新しい未知の領域との間の境界地帯に立っているように見える。」という探究仮説を提示する。

＜注記と考察＞

- (1) この「褒め言葉」（つまりアレテーの意識）の従来的なものについては、イエーガーがクセノポーンの『言行録』の意図として説明している次の文章内容に通じる。

「ソクラテースは最高の、愛国心をつよい、敬虔で高潔なアテーナイ国家の市民であって、彼は神に生贄を捧げ、予言者に助言を求め、困っている友人たちを助け、いつも公的生活で自分の義務を果たした、ということを示すことである。このこと（クセノポーンの叙述：Xenophons Darstellung）に対する唯一の難点は、もしソクラテースが単に俗物（simply a Babbitt, ein solcher Biedermann そのような正直者、俗物）であるならば、同市民の嫌疑を呼び起こすことは決してなかっただろう、ましてや国家にとって危険であるとして死刑の宣告を下されることはなかっただろう、というものである。」

ここで指摘されている通俗的・俗物的な人間の評価の型は、今日にまで及ぶ性質のものであり、現代日本の政治権力によって固執されつづける「期待される人間像」はその典型である。そういう人間評価とは対照的に、歴史的現実のなかで人間人格（＝個人）の尊厳を洞察し描出していくことは、たとえば夏目漱石の（「私の個人主義」1914年、を含む）文学のように、尽きない面白さの核心となる。

- (2) この「ソクラテース文学」（「ソクラテース対話篇」）の成り立ちについては、田中美知太郎他訳『プラトン』（筑摩書房、世界文学大系3、1959年）の、田中の「解説」が充実している。その内容は、全体として、イエーガーの叙述と共鳴しているように判断される。参考までに、その「解説」中の一か所だけを下に引いておく。

田中は、プラトンのシケリアー行きのこと言及しながら、次のように述べている。

「しかもかれの生涯を単なる政治活動家たらしめなかったものは、むしろ政治否定者であったソクラテースとの出会いであり、その師の刑死は一生を貫く衝撃として、かれの精神に一日の安易をも許さなかったのである。わたしたちはこの衝撃の深刻さを、ここにおさめられたソクラテース対話編のうちに、それぞれの仕方で知ることができるだろう。」

ところで、大田堯はその教育論で「根源的自発性」というタームを繰り返し使っている（山本昌知との共著『ひとなる—ちがう かかわる かわる—』藤原書店、2016年、その他）。この「根源的自発性」は、ソクラテースが対話の実践を行ないながら洞察していった一人ひとりの「人格」（＝個人の尊厳）と呼ぶべきものの核心に相応しているだろう。大田も対話の実践を自らの本分の一部とし、探究に向かっているが、そのような教育実践をもつ教育学者として稀有である。その彼の、「ロハ台の実践」として知られる青年期教育実践とその記録は、戦後日本教育史における金字塔である。拙論「『ロハ台』の会話の広場から学ぶ—1950年代の共同学習・生活記録運動を見つめ直す視点」（北田耕也他編著『地域と社会教育—伝統と創造』学文社、1998年、所収）を参照されたい。

古代ギリシアの思想と現代とを安易に対照すべきではできないが、まったく別世界のことにしてはいけない。そうではなく、古代思想と近現代との脈絡を見出していく（ことからの普遍性＝本質を見出していく、つまりお互いに大切にすべきもの

に注意深くなる) 営為こそ、創造的探究の生命というべきだろう。そのような意味で、生活綴り方、生活記録と古代ギリシア思想との本質的関連を問うことは、大事な探究課題となるだろう。拙論「想起に関する研究—社会教育(自己教育・相互教育)の原理をたずねて—」(都留文科大学大学院紀要第7集、2003年3月)の「六「想起説」の本質としての〈探究意欲〉と〈自分自身〉について」を参照されたい。

B. 教師としてのソクラテース (SOCRATES THE TEACHER, Sokrates als Erzieher)

1. ソクラテース——人間の魂における倫理的宇宙を開拓した人——の時代

<訳文> 27p~29p

ソクラテースが今や (now, im folgenden 以下において) 叙述されるべき輪郭は、われわれの探究の全体の動向によって据えられた。彼は、ギリシア人の魂の形成途上における (in the making of the Greek soul, der Geschichte der Selbstformung des griechischen Menschen ギリシア人の自己形成史の) 中心点である。彼はヨーロッパ史におけるもっとも偉大な教師 (teacher, erzieherische Phänomen 教育上の偉才) である。もしわれわれが彼の偉大さを理論と体系的な哲学の領域に見出そうとすると、われわれは彼を過大に、プラトーンを過少に認めるか、さもなければ、それをまったく疑うことに終わるだろう。アリストテレスが、プラトーンがソクラテースの口から語らせた哲学の理論的構造は本質的にはプラトーン自身の仕事である、と考えているのは正しい。しかしソクラテースは、われわれが、プラトーンが描くソクラテース像からイデア—理論と残りの独断的な学説を引くと残る、刺激的な考えの集積をはるかに超える存在である。彼の重要性は、別の次元に在る。彼は科学的伝統の後継者でもなければ、哲学的諸学説の寄せ集めの相続人でもない。文字どおり (literally, in einem durchaus elementaren Sinne まったく基本的な意味で)、彼は時代の人である。彼は歴史の空気を吸い、その光線に照らされている (Um ihn weht echt geschichtliche Luft. 彼のまわりを実に歴史の空気が吹いている)。彼は、あの変わることのない、敬虔な、良心を大切に (conscience-heeding, gewissensstarken 道徳意識の高い) 血統 (stock, Volksschlages 国民性) のアテーナイの (アテーナイ市民の: des attischen Bürgertums) 中流階級、そのゆるぎない誠実さ (loyalty, Gesinnung 心的態度) に、その偉大な貴族的指導者であるソローン⁽¹⁾ やアイスキュロス⁽²⁾ はずっと以前に呼びかけていたのであったが、そのアテーナイの中流階級から出て知的な独立性と自制へ (intellectual independence and self-mastery, geistiger Formung 知的な形成) と昇っていったのである。そして今やその血統 (that stock, diese Schicht selbst その階層自身) が、ものを言う力を見出し (found a voice)、それ自身の息子、つまり石工と助産婦の子ども、の口を通して、アロペケ市区から語った。ソローンとアイスキュロスはかつて、外国から持ち込まれた未発達な革命的な (revolutionary, auflösend wirkenden 解体的な影響を与える) 思想を取り入れ、自分たちの思想の中に組み入れる (verarbeiten 消化する) のに実に適切なきに現れていた。彼らは、それらの考えを非常に深く習得し豊かにしたので、アテーナイ人の本性 (character, Wesens) を崩壊させるどころか、彼らはその強力な力を呼び起こした。そして今や、同じ種類の精神的危機のときに、ソー

クラテースが現われた。強力な帝国の女王であるペリクレス時代のアテーナイは、多くの異なる種類と源の影響に溢れていた；そして、その芸術と実生活のあらゆる領域におけるその輝かしい技量にもかかわらず、アテーナイは今にも自らの精神的な拠りどころを失いかけていた。アテーナイは、自らの饒舌の横溢に酔いしれていたもので、いろいろと言って、またたく間にあらゆる先祖伝来の価値観を消滅させた。⁽³⁾そしてそのときソクラテースが、精神世界のソローンとして現れたのである。というのは、国家と共同社会 (society, Gesellschaft) が徐々に弱らされていたのは道徳的世界からだったのであり、そしてそれをとおしてそれら (= 国家と共同社会) は救われなければならなかった。ギリシア史において再度、ギリシア魂 (soul) の求心力に命じて—あのイオーニア—思想の産物、つまり闘争する自然の諸力という自然哲学の (philosophical, physische 物的な) 宇宙、に釣り合わせる (counterbalance, gegenüberstellt 対置する) ために堅固な道徳秩序 (a firm moral order, eine Ordnung der menschlichen Werte) を立ち上げることによって—遠心力と闘わせたのは、アッティケー⁽⁴⁾の (Attic, attische) 精神 (spirit, Geist) であった。ソローンは社会的、政治的な共同社会 (community, Gemeinschaft) の自然法則を発見していた。ソクラテースは今や、人間の魂における倫理的宇宙を探究した。

彼の青年時代は、ペルシアに対する偉大な戦勝のあとの急速な拡張の時代、つまり国外に向かってはペリクレスの帝国の創設 (the creation, Aufbau 建設) によって、国内においては完全な民主主義の導入によって特徴づけられる時代、にあたる。⁽⁵⁾ペリクレスによる (戦死者に対する : auf die Kriegsgefallenen) 葬送の辞の、アテーナイではどんな功績も才能もそれを発揮する機会を拒まれることはないというくだりは⁽²⁸⁾、ソクラテースの例によって証明される。彼の家柄も、彼の階級も、彼の風采でさえも、政治家としてのキャリアを期待するアテーナイ貴族の多くの息子たちを彼の周りに集めることを、あるいは、彼がしたように、アテーナイ社会の最上層の人びと (the cream, Auslese えり抜きの人びと)、the *kaloi kagathoi* ⁽⁶⁾、に属することを、運命づけてはいなかった。もっとも初期の言い伝えは、彼のことを、ほぼ30歳として、アナクサゴラスの弟子のアルケラーオス⁽⁷⁾の追随者 (an adherent, Begleiter 同行者) だと語っている。(つまり : (als)) キオスの悲劇詩人イオーン⁽⁸⁾は、彼の旅日記で、サモス島での彼の仲間たちのなかで彼に会ったことを記録している。⁽²⁹⁾イオーンは、彼はアテーナイ人をよく知り、ソフォクレスやキモン⁽⁹⁾の友人であったが、アルケラーオスはキモンの仲間属していたと言いつづけている。⁽¹⁰⁾彼は、したがって、若者としてのソクラテースをキモンに紹介したに違いない。⁽³⁰⁾われわれは、彼 (= ソクラテース) の政治的見解が、ペルシアを征服し、アテーナイのスパルターびいきの保守的な党派を率いた、偉大な貴族 (= キモン) とのこの出会いによって影響を受けたのかどうかは分からない。

彼の壮年期には、彼はアテーナイの力がその頂点に達するのを、また古典時代のアッティケーの詩歌と芸術のもっとも偉大な光彩を添えるものが創造されるのを、身をもって知った；彼はペリクレスとアスパシア⁽¹¹⁾の自宅に迎え入れられた；彼の弟子たちの間には、アルキビアデース⁽¹²⁾やクリティアース⁽¹³⁾のような、輝かしい、あるいは疑わしい世評の政治家たちがいる。その頃、アテーナイ国家は、ギリシアで自ら勝ち得た主導的地位を維持することに全神経を注いでいたのであり、そのためにアテーナイ国家はその市民に大きな犠牲を求めた。ソクラテースは何度か、戦場における勇

敢さで著名になった。彼の裁判では、このことは（彼の模範的な軍人の態度は：seine vorbildliche militärische Führung）彼の政治的な不足を相殺するために強調された。^{〔31〕}彼は、庶民に大いなる愛情を抱いた人であるにもかかわらず^{〔31a〕}、衆目の認めるように、一人の貧乏な（poor, schlechter つましい）民主主義者（democrat, Demokrat）であった。彼は、集会や法廷における（裁判における陪審員としての：als Geschworener in den Gerichten）アテーナイ人の熱心な政治的活動を称賛することはできなかった。^{〔32〕}彼はその人生でたった一度だけ政治的に現れた。（すなわち：nämlich）彼は、アルギヌーサイ（の戦い：-schlacht）^{〔14〕}で勝利を得た海軍将官たちが、難破したアテーナイの船の生存者を悪天候によって救出することが出来なかったという理由で（法的慣例を抜きに）一括して死刑を宣告された会議の、議長（chairman, Ratsmitglied und Leiter 評議会（政務審議会）メンバーであり団長）を務めていた。^{〔15〕}ソクラテースは、当番評議員（prytaneis: πρυτάνεις）のなかでただ一人、提案を投票にかけることを、それが法律違反だという理由で、拒んだ。^{〔33〕}後に、それは愛国的な行為と解釈されたかもしれない；がしかし、ソクラテースが、説得（= 言いくるめ）^{〔16〕}に拠る多数支配の原理（das Prinzip der Beherrschung der Masse durch Überredung, the democratic principle of majority-rule 多数決原理という民主政治の原理）は根本的によくないと、そしてその代わりに、国家はもっとも賢明で有能な人びと（the wisest and ablest men, höchstes Sachverständnis 最高の専門的理解力）によって統治されるべきだと考えていたことは、否定しがたいことであった。^{〔34〕}彼はアテーナイの民主主義が年ごとに退廃の度を強めていたペロポネネーソス戦争の間にこの結論に達した、ということは容易に推論できる。彼はペルシア戦争の時代^{〔17〕}の精神に取り囲まれて成長してきたのであり、アテーナイ帝国の興隆を見てきていたのである。その対比があまりにも際立ったものであったので、彼の心にあらゆる種類の批判的な疑いを生みだしたに違いない。^{〔35〕}これらの見解は彼に、寡頭制的（oligarchic, oligarchisch）傾向の多くの（若い：junger）同市民の共感をもたらし、後に、彼の裁判では、彼らの友情のことで彼は非難された。^{〔18〕}大衆は、ソクラテースの独立心のつよい（independent, selbständige）態度が、アルキビアデースやクリティアースのような野心のある陰謀者たちのそれとまったく異なるということ、そしてそれが、政治の領域よりもはるかに広い知的な基礎をもっているということ、理解しなかった。しかし、当時のアテーナイにおいて、政治的行動から離れて立っていた人でさえ、それによって政治的な態度をとっていたということ、また、国家の問題は、例外なく、個々の市民の思想と行動に決定的な影響を及ぼしたということ、理解することは重要なことである。

（以下は継続研究（10）に続く予定）

<注記と考察>

- (1) ソロン：前 639 年頃～前 559 年頃。アテーナイの立法者でギリシアの七賢人の一人。本継続研究 (5) の II. 2. の<注記と考察> (7) を参照のこと。
- (2) アISKYLOS：前 525 / 524 年～前 456 / 455 年。ギリシアの悲劇詩人で、「悲劇の父」と称されている。彼は「ペルシア戦争の国難にあつては兄弟のキュナイゲイロスらとともに出征し、マラトーン（前 490）、サラミース（前 480）、プラタイアイ（前

479) の戦いに参加、とりわけマラトーンの会戦では勇敢に闘い、キュナイゲイロスが英雄的最期を遂げたため、のちに彼ら兄弟の絵がストアー・ポイキレーに掲げられたという。」と説明されている。なお彼は「生涯に 90 余 (別伝では 73) 篇の悲劇およびサテュロス劇を上演したといわれ」、そのなかで『アガメムノン』『供養する女たち』『慈みの女神たち (エウメニデス)』などの 7 作品が「完全な形で現存する」という。彼の演出方法の改良によって「ギリシア悲劇は初めて演劇という芸術にまで高められるを得た」とされる。また、「アイスキュロスの劇は彼の死後も特別の例外としてディオニューシア祭で再演することを許され、多くの人が上演したため、死後も彼は賞を取り続けることになった。」という。(松原著) なお本継続研究 (4) のⅡ. 3. の<注記と考察> (3) を参照のこと。

- (3) 伊藤貞夫は、ギリシア最盛期の象徴としてのペリクレスについて、「その人の生涯に一つの時代が集約的に表現されるような人物——最盛期のギリシアにこれを求めるならば、ペリクレスをおいてほかにないであろう。彼は、アテネをギリシア世界の中心たらしめ、その国政を長期にわたって指導して、古代民主制の範を示した。政治家として偉大であったばかりでない。古典文化の高峰をなす哲学・文学・美術各分野の巨人たちと親交があり、みずからも人格・識見ともにひとときわすぐれていた。ペリクレスの一生をたどることは、すなわち、前五世紀中庸、絶頂期のギリシアの歴史と文化を語ることにほかならないのである。」と解説している (伊藤『古代ギリシアの歴史』講談社学術文庫、2004 年)。

ペリクレスは、前 443 年から前 429 年に死去するまで 14 年間、將軍職に就き国政を指導したが、それは、ペルシア戦争が終結し (前 449 年) てからペロポネソス戦争が始まる (前 431 年) 頃までの、ほぼ中間の時代に該当する (伊藤は「『ペリクレス時代』はアテネと東西二つの大国との間の、東の間の平和のうちに花咲くのである。」と述べている)。その「ペリクレス時代」は、ソクラテース (前 469 年 6 月 4 日頃～前 399 年 4 月 27 日) の 26 歳頃から 40 歳頃までに該当する。

なお、ソフィストの始祖とされるプロタゴラス (前 490 / 485 頃～前 420 / 400 頃) は、「30 歳頃からソフィストとしての活動を開始し、40 年あまりにわたってギリシア各地の都市を巡歴、とりわけアテーナイへは頻繁に訪れて (前 451～前 445、前 432、前 422、前 415)、ペリクレスやエウリーピデースら著名人と親しく交わり、非常な富と名声を得た」とされる。(松原著) プロタゴラスのアテーナイ訪問は、ソクラテースの 18 歳頃から 54 歳頃までに該当する。

- (4) アッティケー：中部ギリシアの半島部で、「歴史時代に都市国家アテーナイの領域として繁栄した地方」で、「前 6 世紀以後はサラミース諸島を含」み、「総面積は約 2550km²、古代ギリシアの都市国家 polis の領域としては、スパルターのラコーニケー (ラコーニア) と並ぶ例外的な広さである。」という。なお、「古典期以降のアッティケーの歴史は、そのままアテーナイの歴史である。」とされる。(松原著)

- (5) 前期<注記と考察> (3) を参照のこと。

- (6) καλός κάγαθος (カロス カガトス)：(氏素性の点からも教養の点からも) 紳士として申し分のない。

- (7) アルケラーオス：前 5 世紀中頃の人。イオーニア学派のギリシアの哲学者で、ア

ナクサゴラスの弟子であり、「自然哲学をイオーニアーからアテーナイにもたらしたとされ、「ソクラテースの師であり、またその恋人（念者 erastes）でもあったという」と説明されている。（松原著）

- (8) イオーン：前490／前480年頃～前422年。キオス島出身の詩人、著述家で、古代ギリシアの「5大悲劇詩人」にも数えられ。「キモーン、ソクラテースらアテーナイの著名人と親交を結び、その著『面談録 Epidēmiai, Ἐπιδημίαι』は彼らをめぐる逸話…（中略）…の源泉となった。」という。（松原著）
- (9) キモーン：前512年頃～前449年。アテーナイの政治家、将軍で、「デーロス同盟およびアテーナイ海上帝国設立の立役者」とされる。（松原著）
- (10) ドイツ語版では、「プルータルコスは、アルケラーオスもキモーンの仲間に親密に関連させている。」となっている。《原文注記》30. を参照のこと。プルータルコスは該当箇所、「尚メガクレスの息子エウリュプトレモスの娘イーソディーケーに対してもキモーンは正式に同棲しながら最後まで普通以上の愛情を示し、その死後非常に悲しんだことは、その悼意を慰めるためにキモーンに対して作られた詩を証拠としてよければ明らかである。哲学者のパナイティオスはその詩の作者を自然学者のアルケラーオスだと考えているが、時代から見るとこの推測は不当ではない。」と記している。（河野与一訳『プルターク英雄伝（七）』岩波文庫、1955年、「キモーン」の四の末尾より）

なお、プルータルコスの記述は、そしてこの段のイェーガーの記述は、ソクラテースの、比較的若い時期の人間形成の諸関係を伺わせる。

- (11) アスパシア：前470年頃～前428年以降。ミーレートスに生まれた女性で、「才色兼備のヘタイラー（高級遊女）として盛名を馳せる。前450年頃アテーナイに來り修辞学と哲学を教え、ペリクレスやソクラテースら一流の市民と交遊する。ペリクレスは名門出の正妻と離婚して、彼女を愛人として迎え入れ」ており、「一説には、ペリクレスの名高い国葬演説（前431末）も彼女が草稿を書いた」とされる、という。（松原著）
- (12) アルキビアデース：前451／450年～前404／403年。アテーナイの政治家・軍人で、「早くに父を失い…、親戚のペリクレスの後見下に育てられる。秀逸な肉体美の所有者で、大勢の身分のある男たちに言い寄られ、また才智と富に恵まれていたので、これらの愛慕者らに対して我儘かつ傍若無人に振る舞ったといわれる。哲人ソクラテースにも愛されて親交を結び、その薫陶を受けたが、とかく奔放な官能生活にはしりがちであった。」という。また「ポテイダイアの攻略（前432～前431）では、師ソクラテースと同じテントに寝泊まりし、負傷したところを師に救われたうえ、その推輓で武勲賞（冠と武具一式）まで贈られる。のちペロポネネーソス戦争（前431～前404）中のデーリオンの敗戦（前424冬）では、お返しに退却するソクラテースの身辺を守り抜いた。」とされる。また「彼の美男子ぶりはギリシア人の間では伝説的」となったという。（松原著）
- (13) クリティアース：前460頃～前403年春。アテーナイの政治家・弁論家・著作家で、「三十人僭主の指導者。ソロンにつながる名門の出身で、哲学者プラトーンの母とは従兄妹同士の関係。」という。また「ソフィストのゴルギアースや哲人ソクラテース

スに学び、従弟のカルミデースほかの美しい若者を愛したが、美青年エウテュデーモスへの狂おしい愛欲をソクラテースにたしなめられて以来、この哲人と不仲になったという。」という説明がある。また「プラトーンが対話篇『クリティアース』で彼(異説では同名の祖父クリティアース)を描いていることは有名。」とされる。(松原著)

- (14) アルギヌーサイ：ペロポネネーソス戦争末期(前406年夏)のアルギヌーサイでの海戦で、アテーナイ艦隊がスパルター海軍を撃破した。しかし、「北から暴風が襲ってきたので、アテーナイ軍は沈没しつつある味方の12隻を見捨てて避難し、ために4千名もの乗組員が犠牲になった。これに逆上したアテーナイ市民は、生還した將軍6名を逮捕しカッリクセノス kalliksenos の提案で一括処刑に付した。ところが数日後、興奮から醒めた民衆は將軍たちを殺したことを後悔し、今度は死刑の動議を出した者たちを死刑に処して溜飲を下げた。」と説明されている。(松原著)

言うまでもないことであるが、この事項に関しては、ソクラテースが『弁明』のなかで、次のように直接言及している(久保勉訳、岩波文庫)。

「アテナイ人諸君、私は未だかつて国家における他の公職に就いたことがない、ただ参政院議員になったことがあるだけである。そうしてたまたま私の属しているアンティオキス族が当番にあたっているときに、諸君は海戦の後で死屍を収容しなかった十人の將軍に対して、人からげに有罪の宣告を下すことにきめたのだった。それが違法行為であったことは諸君も後には皆承認せられた通りである。当時であっては当番議員中ただ私一人が諸君に反対して違法行為に出ないようにと告げたのであった。そうして私はこれに反対の投票をしたのである。…」

この箇所について訳者の久保は注記のなかで次のように説明している。

「…当時の指揮官らは戦闘の後破片に取纏って波浪の中に漂流している人々を救いまた戦死者の屍を拾い上げんと務めたが、折柄の暴風に妨げられてその意を果さなかった。しかるに審判者らは党派心に駆られて、一人ずつ別々に裁判に附することを規定せる法律に反して、それらの將軍全体に対し同時に有罪を宣告することを決議した。」

なお田中美知太郎(『プラトン全集1』岩波書店)は訳注の中で、「十人の軍事委員が責任を問われ」、「実際に裁判されたのは六人であった」と説明している。

- (15) chairman を「議長」(Leiter を「団長」と訳しておいたが、同前の田中美知太郎の訳文の文脈では、ソクラテースは、政務審議会の「執行部(πρυτανία プリュタネイアー)の委員」ということになっている。

πρύτανις(プリュタニス)は500人評議会の常任委員会の委員、当番評議員のことで、イエーガーの訳文の直後に出てくる πρυτάνεις(プリュタネイス)はその複数形。πρυτάνεις の職が πρυτανεῖα。

- (16) 「説得」(die Überredung) と一般に訳されている πείθω(ペイトー)の「説得」には、「信じ込ませる・言いくるめる・騙す」という意味合いがある。ソクラテースが実際に経験し、そして対話篇『ゴルギアース』で批判的に吟味していることは、ことごとらについての知(真実)とは無縁の説得術(事柄そのものがどう「ある」かを明らかにしようとするのではなく、さも知っているかのように「見える」ようにする

こと)の流行であり、そういう意味での「説得」は、明らかに「言いくるめる・騙す」という意味合いで使われている。イエーガーのこの文脈を理解する上で、またソクラテース・プラトンの原理探究の意味を理解する上で、非常に重要なことなので、訳文中に「言いくるめ」を補足して入れておいた。なお *die Überredung* には「説得」「説き伏せ」という意味が、また *persuade* には「説得する」「説き伏せる」「思い込ませる」という意味がある。『ゴルギアース』については、《原文注記》34. の〈注記と考察〉(8)を参照のこと。

- (17) 「ペルシア戦争の時代」は *der Perserkriegszeit* の訳である。英語版では *of the Persian victory* となっているが、「ペルシア戦争に対する勝利」という意味に理解しておく。
- (18) 「彼らの友情のことで彼は非難された」(*deren Freundschaft man ihm ...zum Vorwurf gemacht hat, their friendship was cast up to him* 彼らの友情が思い出され彼はののしられた); 『ソクラテースの弁明』で、告発者による告発理由がソクラテースの「弁明」として確認されているが、その一つが「ソクラテースは青年を腐敗せしめている」というものである。イエーガーは、このことを述べているのであろう。なおイエーガーのこの段の叙述は、『弁明』の時代とソクラテースその人を理解することに私たちが誘ってくれる。

《原文注記》

28. Thuc.2.37.1.⁽¹⁾
29. Diog.Laert.2.23.⁽²⁾
30. プルタークは、*Cimon 4 init. and ad fin.* において、アルケラーオスによってキモーンに宛てられた詩に言及しているが、おそらく彼とアルケラーオスとは、メンミウス⁽³⁾のルクレーティウス⁽⁴⁾に対するのと同じ関係に立っていた。(ドイツ語版注記では、プルタークの「キモーン4」の該当内容の説明となっている。)
31. プラトーン『ソクラテースの弁明』28e.
- 31a. ソクラテースの、庶民への愛情については、クセノポーンの『ソクラテース言行録』1.2.60.を参照のこと。⁽⁵⁾
32. ソクラテース自身の、プラトーンの『弁明』31eにおけることばを参照のこと：‘諸君に対し、または他の民衆に対し敢然抗争して、国家に行われる多くの不正と不法とを阻止せんとする者は、何人といえどもその生命を全くすることが出来ないであろう、むしろ、本当に正義のために戦わんと欲する者は、もし彼がたとえしばらくの間でも生きていようと思うならば、かならず私人として生活すべきであって、公人として活動すべきではないのである。’⁽⁶⁾ これらのことばにある激越な感情はプラトーン自身のものである：それは、ソクラテースの死についての彼の認識に由来しているし、それを前提にしている。しかしもちろん、そのことばはソクラテースの実際の振る舞いを説明するためのものである。
33. プラトーン『弁明』32a；クセノポーン『言行録』1.1.18.⁽⁷⁾
34. プラトーン『ゴルギアース』454f,459cf.,そして随所で。⁽⁸⁾
35. クセノポーン『言行録』3.5.7そして14を参照のこと。そこではソクラテースはアテーナイ人の‘古い品位 old decency’ (*ἀρχαία ἀρετή* 古い美德)の崩壊について

述べている。プラトーン『ゴルギアース』517bf. も参照のこと。⁽⁹⁾

<注記と考察>

- (1) トゥーキューディデースが『戦史』において、ペロポネネソス戦争の戦いで斃れた戦士たちの国葬でペリクレスが語ったとして記している有名な葬送の辞のことで、イエーガーが直接に指示しているのは、その前段の一部で、下記のとおりである（久保正彰訳、岩波文庫一上巻）。

「われらの政体は他国の制度を追従するものではない。ひとの理想を追うのではなく、ひとをしてわが範を習わしめるものである。その名は、少数者の独占を排し多数者の公平を守ることを旨とし、民主政治と呼ばれる。わが国においては、個人間に紛争が生ずれば、法律の定めによってすべての人に平等な発言が認められる。だが一個人が才能の秀でていることが世にわかれば、無差別なる平等の理を排し世人の認めるその人の能力に応じて、公の高い地位を授けられる。またたとえ貧窮に身を起こそうとも、ポリスに益をなす力をもつ人ならば、貧しさゆえに道をとぎされることはない。われらはあくまでも自由に公につくす道をもち、また日々互いに猜疑の眼をおそれることなく自由な生活を享受している。よし隣人が己れの楽しみを求めても、これを怒ったり、あるいは実害なしとはいえ不快を催すような冷視を浴びせることはない。私の生活においてわれらは互いに制肘を加えることはしない、だが事公に関するときは、法を犯す振舞を深く恥じおそれる。時の政治をあずかる者に従い、法を敬い、とくに、侵された者を救う掟と、万人に廉恥の心と呼びさます不文の (ἄγραφοι, unwritten) 掟とを、厚く尊ぶことを忘れない。」（挿入したギリシア語と英語はローブクラシカルライブラリーによる。）

なお訳者の久保は引用文の始めの方にある「民主政治」について、次のような訳注を記している。

「古代ギリシアにおける「民主主義」とは、一般市民が政権担当者を選出できることであったが、誰でも政権を担当できるということではなかった。つまり民意を反映した貴族・富裕階級の政治であった。『戦史』に現れる諸国の貴族派、民衆派の違いは、要するに民意を汲むか否かにおいて意見を異にする、貴族らの政派であったにすぎない。アテナイにおける民主主義理念は、さらにこれに加えて、法の前での平等と、能力主義を標榜する、とペリクレスは言う。」

ところで訳者の久保は、ペリクレスの上述引用文末尾にある「万人に廉恥の心と呼びさます不文の掟」に長い訳者注記を付しており、そのおしまいで、「…自由を守ることは、法や為政者だけの問題ではなく、すべての市民の心の態度にかかっている。文字にかかれぬ掟を持する誇りと覚悟がなくてはならぬ。プラトーン『クリトーン』の最後で、ソクラテースが語る自由と掟の言葉も、これと同一の精神に基づいている。」と指摘している。この、古代ギリシア思想の核心に相当すると考えられる、「不文の掟」については、拙論で、ソポクレースの『アンティゴネー』（前442 / 441年頃）にも現れていることに言及した。アンティゴネーは、「書き記されてはいなくても (ἄγραπτα, unwritten) 揺るぎない神さま方がお定め掟」というこ

とばに続いて、「だってそれは今日や昨日のことではけしてないのです、この定りはいつでも、いつまでの、生きてるもので、いつできたのかを知ってる人さえありません。それに対して私が、一体誰の思惑をでも怖がって、神さま方の前へ出て、責を負おう気を持てましょう。…」と語っていく。(呉茂一訳、岩波文庫) ここには、人間と社会には、地上の権力者たちの立法や法改変などによっても侵し得ない、根源的原理(摂理)が在るという洞察が示されている。この洞察に信を置いて、アンティゴネーは、「…ここにいる方々だって、みな賛成して下さいませうね、もし恐れのために舌が縛られてなかったら。ともかく、王さまの権威というのは、ずいぶんいろいろ結構なことがありますのね、勝手なことを、やったり言ったりできるなんて。」と権力者クレオンに向かって語るが、そのことばは、2500年を経た今日に向けられているようである。なお、『アンティゴネー』とトゥーキューディデースとの関係については、『戦史』の訳者である久保が「解題」で論じているが、久保は、「史家が二十歳前後の頃、ソポクレスの悲劇「アンティゴネー」が上演された。」と指摘している。

<拙論>

- ・「ヒューマニティの思想の現代性について—ギリシア的パイディア—(教養)の再生を考える—」(教育科学研究会編集『教育』2008年2月号、所収)、
 - ・「[人間性の開花]と表現・文化活動—ヒューマニティの意識化とその継承に学ぶ—」(『月刊社会教育』2009年2月号、所収)
- (2) ディオゲネース・ラーエルティオス：前出 II. A.《原文注記》の〈注記と考察〉(1)
- (3) ガーイウス・メンミウス・ゲメッルス：?～前46年以前。独裁官スッラの娘ファウスタ・コルネーリアの夫(のち離婚)で、護民官(前66年)や法務官(前58年)、属州ビーテューニアの総督にもなっている。「弁論術や文学に秀で、詩人カトゥッルスやC.ヘルウィス・キンナらと親交があり、ルクレーティウスからは大作『事物の本性について』を捧げられている。」とされる。(松原著)
- (4) ルクレーティウス：前99／94年～前55／51年。ローマ共和政末期の哲学的詩人で、松原著では次のように説明されている(抜粋)。

「彼の作品としては、友人のC.メンミウス(詩人カトゥッルスの保護者)に献じた哲学的教訓詩『事物の本性について De Rerum Natura』(全6巻、7400余行)が唯一現存している。これは叙事詩の韻律たる六脚律を用いて、自らの信奉するエピクロースの哲学を祖述したもので、宗教的迷蒙を打破し、人類を神々や死に対する恐怖から解き放つことを目的とした古今に比類のない哲学詩である。その思想はエピクロースの依拠したデーモクリトスやレウキッポスの唯物的な原子論で貫かれており、あらゆる現象を自然の原因から説明しようと努め、「宇宙は無数の原子の偶然的会合から生じたもので、神々は存在するにせよ人間にはまったく関与しない。死は身体がそれを構成する原子に解体するだけの現象で、靈魂もまた物質的であり身体とともに消滅する」と主張した。彼はその近代的な科学精神のゆえのみならず、主題の雄大さ、考察の明晰さ、詩想の高邁さの点でも傑出しており、ラテン詩新境地を拓き、ウェルギリウスやオウィディウスら少なからぬ文人に感化を及ぼした。しかし、作品の性質上、大衆受けはせず、ラクタンティ

ウス他のキリスト教学者からは「不敬な無神論者」として弾劾され、中世ヨーロッパにおいてはまったく忘却されていた。がその後、ルネサンス期に再発見されて以来、ローマ思想の最高峰の1つとして極めて高い評価を受けるに至った。」

なお引用文で指摘されているルクレーティウスの哲学的教訓詩は、『物の本質について』として、樋口勝彦によって1961年に訳出されている（岩波文庫）。

- (5) 『ソクラテース言行録』の該当箇所は下記のとおりである（内山勝利訳）。

「ともあれソクラテースが、告発者の言うところとは反対に、民衆寄りで誰にもやさしい人であることは明白であった。なぜなら、彼は、アテナイの街の人たるとよその国の人たるとを問わず、多数の熱心な信奉者を持ちながら、その集まりに対してけっして報酬を取らず、彼の持てるものをすべての人に惜しげもなく分け与えたのである。そのわずかな部分を彼から只で手に入れた一部の者たちは、それを他の人にたちに高く売りつけ、しかも彼のように民衆寄りの態度をとらなかった。彼らは、金銭を支払うことができない人びととは、談論したがらなかったからである。」

- (6) 『弁明』のなかの該当箇所の訳は、久保勉訳（岩波文庫）を用いた。その中の、「公人として活動すべきではない」の箇所は、イェーガーは、must …not enter politics と記している。ローブクラシカルライブラリーでは、「ιδιωτεύειν, a private man」との対応で、「μη δημοσιεύειν, not a public man」となっているが、意味合いは同じであろう。なお、ιδιώτης（イディオオーテース）とδημουργός（デーミウールゴス）との対比については、本継続研究(5)のII.4. <注記と考察> (2)(3)を参照のこと。

- (7) プラトーン『弁明』32a そのものは、31e に連続しており、32b から「参政院議員」（田中美知太郎訳「政務審議会の議員」）のときの経験が語られる。

またクセノポン『言行録』1.1.18. は、次のようである（佐々木理訳、岩波文庫）。

「かつて彼が審議員にされ、国法にしたがって協議にあたりますという審議員の宣誓を陳べ、そしてたまたま国民会議の議長になったとき、国民が国法に反して一つ投票で以てツラシュロスおよびエラシニデースら九人の将軍を、全部死刑にしようとしたのであるが、ソクラテースは敢然これに反対した。もとより国民は彼の態度に憤激し、数多の有力者は彼を威嚇したのである。しかしソクラテースには宣誓を守ることが、正義に反してまで民衆の機嫌をとったり、権力家の威嚇をさげたりするより、はるかに大切であった。…」

- (8) 『ゴルギアース』の該当箇所(454f.,459cf.)では、弁論家の「説得」について、「知識の伴わない、信念だけをもたらず説得 (persuasion, πειθω: 説得する・信じ込ませる・言いくるめる・騙す)」だとして吟味されていく。その対話の一部を下記に抜粋しておく。(加来彰俊訳『ゴルギアース』岩波文庫、1967年、挿入の英語、ギリシア語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

「ソクラテース したがってまた、弁論家というのも、正しいことや不正なことについて、法廷やその他の集会を教えることのできる人ではなく、ただ信じさせることができるだけの人間なのですね。というのはむしろ、あれだけ多く集まっている人たちに、しかもそのように重大な事柄を、短時間のうちに教えるなどということは、とうてい、できることではないでしょうからね。」

「ソクラテス いや、この場合だけではなく、その他のどんな技術に対してでも、弁論家と、そして弁論術とは、いまと同じような関係にあるということになるでしょう。つまり、事柄そのものについては、それがどうあるかを、弁論術は少しも知る必要はないのであって、ただ、ものごとを知らない人たちに対してだけ、知っている者よりも、もっと知っているのだと見えるようにする、何かそういう説得の (of persuasion, πειθοῦς) 工夫を、見つけ出してあげればいいわけなのです。」

イエーガーが、ソクラテスが疑問視したと指摘する「説得に拠る多数支配の原理」という「民主主義」の矛盾は、現代性をもつ根本問題であり、知と教養・教育との関連の問いを切実にする。

- (9) 指摘されている『言行録』の3.5.7では、大ペリクレスの息子である小ペリクレスとの会談が記されており、そのペリクレスの「いまは彼らがすこぶる従順になっているとしますと、今度はいかにして彼らを鼓舞激励し、再び往古の美德と名声と幸福とを欣慕せしめるべきであるかを、語るべきであります。」という対話のことばとなっている。また同14は、ペリクレスの「どうしたらわれわれは往時の美德をとり戻せるでしょう。」という問いにソクラテスが応じていく内容となっている (佐々木理訳、岩波文庫)。しかしイエーガーが指摘する『ゴルギアース』517bf. では、ソクラテスは「…けれども、欲望の言うとおりにならず、その方向を向けかえて、説得なり強制なりによって、市民たちがよりすぐれた者になるはずのところへ、その欲望を導いて行くという点では、あの人たちは、現代の人たちと比べて、言ってみれば、何一つちがうところはなかったのだ。そのことこそまさに、すぐれた政治家のなすべき唯一の仕事なのだけれどもね。しかし、船や城壁や船渠や、その他数多くのそういったものを、国家に提供するという点では、あの人たちのほうが現代の人たちよりも、ずっと手腕があったということは、ぼくも君に同意しているのだ。」と語っており、踏み込んだ内容の対話になっている。

Ⅲ. 現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート②～継続研究(7)における～

[イエーガーは『パイデΙΑ』第1巻の「序文」で、「今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」という確信がこの著を生んだと語り、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようと努めるすべての人びとのためにも向けられている。」と述べている (本継続研究(3)、Ⅱ. 第1章<訳文①>)。イエーガーはこのように、現代という時代の課題の洞察を含んで古代研究に向かい、大著を完成させている。本継続研究は、このようにして成し遂げられた研究の瑞々しさに触発されたものであり、『パイデΙΑ』を読みながら考察意欲を引出されている諸点についても、この拙論そのものとして展開することはできないけれども、『パイデΙΑ』研究の一環として記してみようと思う。]

ここでは、勝田守一（1908年～1969年）の教育研究の世界に目を向けておきたい。現代日本の教育研究において、古代ギリシア哲学・思想は、たとえば、教育思想史という専門領域の対象として考察されたり、あるいはプラトンの諸対話篇の教育・教養論的特徴の全体像を構成するために詳細な読み込みがなされたりと、さまざまにアプローチされてきている。けれども、勝田がなしたように、今日の当面している教育・文化、あるいは教育実践の課題の解明に重大な指針を与えるものとして探究心が向けられるということは少ないように思われる。

勝田の探究足跡が、教育実践をコアにする教育、文化・社会の、アクチュアルな課題に答えようとするものであったことは、その『勝田守一著作集』（国土社）の全7巻（1972年～1974年）に示されている。このことは、勝田の、すでに戦後日本教育学の古典になっている『能力と発達と学習 教育学入門1』（国土社、1964年）の、その「まえがき」の次のようなことばからも見てとれる。

「私は、著書と名のつくものをまとめたものは、戦後でもこれがはじめてではないが、どういうものか、処女出版のような気持ちである。というのは恐らく、すべて自発的に主題を選択して執筆した最初の仕事だったという理由によるのだろう。このほかに、多くの文章を書き続けてきたけれども、それらはほとんどすべて、課題をあたえられたものであった。…（中略）…

この仕事も、もちろん大きく見れば、与えられた課題に答えようとするものである。しかし、ここでは私の主観が国民によって与えられた課題として選択したのである。私の主観の選択と課題にふさわしい力量、という二つの問題がこの書物には含まれている。そのせいか、私は、この書の出版に、胸のときめきを感じさせる不安と期待のようなものを禁じえないでいる。」

勝田の探究足跡が示しているもう一つの重要な特質（=本質）は、彼は、アクチュアルな日本の教育実践をめぐる諸問題の解明のために、たえず古典、あるいはギリシア哲学・思想と対話している、ということである。このことは、今日まで多くの研究者が‘勝田教育学’を論議してきているけれども、あまり論及されることはないように見える。勝田がイエーガーの『パイディア』に向かったのは、上原専祿の示唆があったということであるが⁽¹⁾、イエーガーの研究世界と勝田自身の研究姿勢との間には本質的な共鳴関係が内在していたと考えてよいだろう。今後、勝田の仕事を古典との対話という角度から検討していくために、ここでは、勝田の論考をコメントすることなく抜粋して引いておく（立ち入った考察は、この継続研究とは別のものとして試みたい）。

【資料 - 4】

「西洋教育史の古典について」（ペスタロッチ100年祭記念講演草稿、1957年；『哲学論考・随想 勝田守一著作集7』国土社、1974年、所収）

（以下に引くのは論稿の中間部で、「たとえば」ということでコメニウスの教育思想の先見性に言及しながら論じているパートである。）

「それにしても、私たちは、300年後の今日、なお私たちの社会で実現し得ないではいるが、しかしその実現を正当な願とするようになったそのような思想を、

そのように早くとらえた人の力に驚きの思いを消すことができません。驚嘆するという事は、決して、私たちが、古典の思想に対して科学的実証的なメスを入れることを不可能にするということではありません。むしろこの驚嘆と尊敬との思いが、私たちのその謎をときたいという研究意欲をかき立てるといってよいかもしれません。

その謎の解決は、研究にまたなければなりません、その偉大な古典的価値が、その人の生きた時代の悩みと問題をとらえた深さによって支えられているということは明かでありましょう。

その解決への方向が、問題をとらえた深さによって、数百年ののちまで、ひとびとの理想を求める心を動かす思想を生み出すということは、ひじょうに重大なことだと思えます。ルソーはプラトンの『国家』について、次のようにいっています。

「これは、その標題からしか判断しない人が考えるような政治の書物ではない。それはひとが今までにしたもっともみごとな教育論である」

プラトンとルソーの間には、二千年の歳月が横たわっています。ルソーのことがばが誇張を含んでいても、かれがその古典に動かされた証拠は多分にあります。その『民約論』という政治論の中にさえも、教育つまり人間形成の役割を尊重する方向を含んでいます。

もちろん、二千年以前の古典の思想が十八世紀の人にそのまま再現したと考えるのは愚かなことでしょう。また、ルソーから動かされるものが、ルソーの中にあるプラトンにうごかされるのではないことも確かです。それはルソーのものであって、プラトンとはちがいます。ただ私たちは、時代を超えて、人を動かす古典の価値が、時代の課題にとりくんだその人の力量とその解決への深さによって生まれていると考えることがたいせつなのだと思います。

もちろん、プラトンの思想は、古代ギリシアの奴隷制社会に制約されていますし、当時の学問の水準に制約されています。そして、そのかぎり、それは十八世紀の思想とはちがいます。しかし、理想の国家にふさわしい人間形成の理念を追求したその思想は、ジャコビニズムの源流といわれるルソーに再現しているとみるのは必ずしも不自然ではないでしょう。

しかし、そのために、ルソーをプラトン主義者だというならば、再び私たちは誤りをおかすことになるわけです。なぜなら、ルソーの直面した問題は、十八世紀のフランスのものであり、二千年前のギリシアのアテナイのものではないからです。

にもかかわらず、社会の転換に立ちつつ、その問題の解決にとりくむすぐれた精神が、古典の中にその理想を感動をもって読みとることが可能であるという驚くべき事実を私たちは考えなければならぬと思えます。」

【資料 - 5】

「人間形成と数学教育」(1958年；『人間形成と教育 勝田守一著作集4』国土社、1972

年、所収)

論考は、「一 問題の意味」「二 プラトンと数学教育」「三 実用性と人間形成」「四 抽象的・論理的思考と人間形成」「五 実践と抽象的思考能力」という構成になっている。下記は、その「二」のパートである。

「意識的な教育で、数学の価値を、はっきり問題にしたのは、ギリシアのプラトンにおいてだろう。当時のアテナイでは、初等教育で、じっさいに市民の子どもたちに算数が教えられていた。ごく簡単な数をかぞえたり、量をはかったり、それから暦法の知識や貨幣の単位や計算を学んだりするのは、あらゆる市民生活に、たとえば、家事、政治、生産技術、戦争などに必要だとされていた。そういう算数をプラトンは実用算数 (loqistike) とよんでいた。それはものをかぞえたり、数を比較したりするという意味である。

いわゆる算術 (arithmetike) というのは数についての理論であり、もっと理論的、抽象的なものでこれは選ばれたものの受けるいわば中等教育の領域での教科になる。つまり、理論算術と幾何学と天文学および音楽の一部を含めて、数学的訓練としていた。

プラトンの教育論は、思想家の一つの主張であって、じっさいにアテナイの子どもたちが、そういう教育を受けていたわけではないが、前にもいったように、実用算数はじっさいに初頭の段階でアテナイの市民の子どもたちが勉強していた証拠は、存在している。そろばんの一種 (アバコスあるいはアバクス) が、学校で使われていたらしい。それは次の図のようなものであったといわれている。(引用者注：小論ではこの図を略す)

こういう板面の上に小石をならべて計算をやっていたらしい。アリストパネスの喜劇の中に、登場人物が「小石でなしに、指でかんじょうをしろ」という場面があるそうである。これはアバコスを使わずに指でやれということである。(K.J.Freeman: Schools of Hellas, 1907)

アテナイの学校の子が、アバコスから出てきた将棋のようなものやあるいは、いまのお手玉のようなものをつかって、遊びといっしょに実用算術の学習をやっていたと学者は伝えてくれる。そしてプラトンもそういう算数の市民生活に対する実用価値を大いに認めていた。

しかし、プラトンが理論的算術や幾何学の学習に期待したのは、もちろん一方に実用的な意味を認めないではなかったが、かれにとってはそれ以上に、市民形成にとって重要な教育的訓練の意味をもっていた。そして、そのことは、かれの考えた理想的な社会生活と関係があったのである。

簡単にいえば、算術も幾何も天文学も、ともに生産技術や商業やさらに戦争の実用に役立つ。しかし、だいたいなことは、現象的なものを超えて、数そのものや形そのもの、運動そのものという「ほんとうの存在」や不変の「真理」を学ぶことができるということにその価値を認めることである。したがって、不変の「真理」や「ほんとうの存在」を認識することが哲学者の仕事だとすれば、数学は哲学者の必ず学ぶべき学問ということになる。伝説によれば、プラトンは、自分の学院「アカデミア」の入り口に「幾何学を学ばざるもの入るべからず」という標語をか

かけていたといわれている。それは、感覚的で転変する現象の背後に、不変の真理、形そのもの、イデア（形相）を見ることのできるもの、今日のことばでいえば、抽象的観念を自由に正しく使用できるもの、でなければ、永遠の真理に到達するより高度の哲学（弁証論・ディアレクティケー）を学ぶ能力はないということであろう。

ここで触れておかなければならないのは、前にもいったように、プラトンの教育論は、理想国家形成と密接な関係があることである。その教育論は「法律論ノモス」と「国家論ポリテイア」に主として現れている。「国家論」では、永遠の真理、最高善を認識し、不変のイデアの世界にのぼりつめ、哲学的訓練を受けて最高の知恵をもったものが、正義の支配を行うために地上の国家におりてくることになっている。このような哲人王を、選ばれた少年の中から育てることを目指して、教育が考えられているのである。途中まではいけても、感覚的世界を抜け出ることのできないものは、生産者としてとどまり、戦争のための数学を学び終えても、それ以上の不可視の世界にのぼり得ないものは防衛者（戦士）にとどまり、哲学の世界にのぼったものだけが善のイデアの認識にもとづく正義の支配を行う資格をもつのである。いわば一種の才能教育であるが、奴隷をのぞいて、プラトンは、出身階層によってではなく、能力によって階級（かれの場合には分業的階級つまり生産者・防衛者・統治者の階級）を構成することを考えていたことになる。

数学の教育は、そういう教育課程で大きな位置をしめる。だから、プラトンにとっては、数学は実用のためのものでもあるが、人間形成という観点からその意味がとらえられているのである。

数学は、算術にしても幾何学にしても、抽象的観念の学問である。プラトンは、この抽象的思考の能力の訓練に、形式陶治的な意味を認めていたといえる。たとえば

「この知識（算術）は、ほんとうに必要なものだということを、きみは理解するだろう。というのは、それはたましいが、真理そのものに到達するために純粋な理性を使用するようにさせるからである。」といい、続けて、

「生まれつき計算の力をもっているものは、ほとんどすべての知識を早くわがものにするし、頭のにぶいものでも、計算を学んでたとえそれがうまくならないでも、精神の聡明さは多少ともますものであることに、きみは気づいただろう。」（『国家論』七巻）

といっている。

これは、のちに、その影響を受けたイソクラテスによってもっとはっきりと「わたしは、この学習（数学の学習）を精神の体操であり、哲学の準備と考える」ということばでいいあらわされる。

プラトンは幾何学についても同じようにいっているのだが、それはのちの^{ママ}形成陶治説と同じかという^{ママ}と必ずしもそうではない。そこには、ギリシア的な世界観である不動と調和と統一こそ真理であるとする思想が、背景になっている。そして、ピタゴラス派の影響を受けたプラトンが、数学の抽象的観念の世界を、真理

の世界に近似した不変の世界とみたという背景を見のがすことはできない。

下記は、「四」のパートの中間部である。

「しかしわたしたちは、プラトンの考えの深さには敬服するけれども、二つの点でその考えに承服しかねるのである。

第一は、プラトンが、実用とたましいの訓練とを同様にみていたことは正しいが、しかし両者の関係が、単に実用とたましいの訓練とに分けられてしまったことである。そして、この分裂がけっきょくプラトンの理想国家を哲人王の支配にまかせてしまうことになり、労働や生産と理性とを無関係にさせてしまい、分業的協力でなく、階級の固定をもたらしことを正当化してしまった。

第二は、そのことと関係するのだが、数学的抽象の世界を不動の、不変の、永遠の、そしてそうであるがゆえに調和の世界と関係させてしまったことである。抽象的観念は、たしかに感性的で具体的ではあるが不定な印象とはちがって、認識を固定して、ものの関係を明確にする役割をはたすのである。しかし、抽象的なものが、感性的な印象や具体的な活動と切りはなされれば、生き生きとした現実を理性的に認識し、現実の不合理を行動によって合理化するために変革する能力と結びつくことができない。このプラトンの教養観から、墮落した教養主義としての形式陶冶の思想が生まれたのである。

下記は、「五」のパートの末尾（したがって論考の末尾）である。

「数学教育に合理的精神の成長を要求したのは資本主義社会であった。そして数学教育は、資本主義社会の要請にこたえとともにそれを超えて、合理的な精神をすべての子どもたちに育てていくという任務を自覚していくのである。現代の人間形成とはじつはそういうことなのである。おそらくプラトンが現代に生きていたら、この現実にとって新しい壮大な理想社会のための数学教育を描くだろう。わたしのささやかな思考はそれを組み立てる一つの石にはなるかもしれない。」

<注記と考察>

(1) 勝田の「イエーガーの《パイディア》」については、堀尾輝久は、勝田が上原専禄の問題提起を受けて報告したものと、『勝田守一著作集 6』の「解説」で、次のように記している。

「『パイディア』は、国民教育研究所の思想委員会で報告されたものである。上原専禄氏の問題提起を受けて、勝田は、イエーガーのパイディア (Jaeger:Paideia) を中心に、ギリシャにおける教養思想の展開を報告した。この報告は二回にわたり、なお継続が予定されていたものである。

人間形成の問題を、一方で発達を軸とし、他方で、人類の歴史のなかに位置づけようとする視点は、すでに『教育学入門』にその基本的構想は示され、その第四章は教養の問題を中心に論ぜられている。本論文は、この章を補うものとして読まれたい。

また、第二部付論の院生への講演「教育研究の方法について」では、「ヒューマニティズとしての教育学」の意味が強調されているが、このことは、「パイディア」と「教育」の必然的意味連関をみればうなずけよう。パイディアは、ラテ

ン語のウマニタスに移され、ヒューマニティズへとつながっている。この教養思想の歴史のなかに、教育と教育学の歴史を位置づけなおしてみると、イエーガーの『パイディア』とのとりくみに意欲をもやした勝田の教育学構想の、人類の歴史を含んでの拡がりが見えてくる。」

Received: December 02, 2016

Accepted: December 06, 2016